
リリカルなのか？黄金の瞳のバジリスク

たかB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのか？黄金の瞳のバジリスク

【Nコード】

N9422V

【作者名】

たかB

【あらすじ】

二次小説 リリカルなのか？無を有する剣。のもう一人の主人公、ツキノサカサ月野逆。サカサが従兄弟のツルギに黒の大剣、避来矢を渡した後の行動を記した探検記である。世界中にいる敵対組織を潰すハラゲロ主人公。本編より狂気じみています。本編の序章と一話を見た後に読んでくれるとうれしいです。

第一話 サカサのレアスキル。（前書き）

前ふり かなり腹黒い主人公ですよ

第一話 サカサのレアスキル。

ガガガガガガガガンッ！

平和なジャングルの中には不釣り合いな銃撃音が鳴り響く。その一端を担っている白衣の男。名をサカサ。サカサは熱帯雨林の中を南方向に走りながら、長い茶の髪を躍らせながらハンドマガジンを乱射する。

「ミネルヴァ、この辺の残党は？」

「索敵……。西方向勢力2。北5。南1。：訂正、南勢力戦意喪失。残存勢力北北西に撤退」

「よしっ、残るは後方勢力！」

巨大な植物。獣道。湿った地面。高温多湿な環境は日本人には不向き。その上、視界の悪いジャングルでサングラス。ましては左腕にガンドレットを装着し、ハンドマガジンを両手に持ちながら走るなど訓練された兵隊でも前もって調べていたとしても不可能に近かった。しかし、サカサにとって少しでも可能性があるのならそれを可能にすることが出来た。

それはデバイスという異世界の道具。サカサに話しかける声はサカサの左腕に装着されたガントレット型のデバイス。ミネルヴァ。このミネルヴァの能力は半径二キロ以内にいる人間の悪意や憎悪を持つ人間をサーチすることができる。それ以外にもあるが今回はそれだけで事が足りるためまたの機会にさせてもらう。

レアスキル。千樹せんじゅいちよう一葉。

なのはに膨大な魔力を扱う技術と空間把握能力があるように。

フェイトに魔力を電氣に変えるように。

サカサには目の前にある物。はては人間や生き物に至るまでその物体や生き物がこれまでどのような経過で今その場にいるか、様々な可能性から一番近い可能性を見出すことが出来る。

加えて、普段忘れていたとしても、今まで蓄えてきた知識や技術に必要な分だけ思い出し、一番効率的な行動を瞬時に行うことが出来る。

例えばたった一枚の葉っぱを見ただけでその植物の分類はもちろん、いつ、どこで、なぜ、誰に、何に、どのような理由でここに存在しているかを判断できる。一枚の葉。それに近いごくわずかな情報からでも千本もの同種の樹木といった莫大な情報量からでも特定できる。恐るべき鑑定眼である。

そして、今、現在。ジャングルの中を走り回れることも、たとえば初めて握ったハンドマガジンでも振り回すことが出来る。そして何より…。

「サカサ、左方向より」

「あいよ」

ガガガンツ。

サカサ自身が自他ともに認める天才。

レアスキル使用により、相手の行動が予想、いや予知できる。相手の状態、相手が持っているだろう自分の情報。戦況、心理、装備など少し見たただけでほとんど把握できる。

「げっ」「がう」「ごお」

ミネルヴァが敵の接近を報告する前にハンドマガジンを三発茂みに打ち込むと悲鳴が上がり迷彩服と防弾チョッキを着た兵隊たちが茂みから転がりながら出てくる。しかも皆が皆鳩尾に被弾していたり、眉間をを抉り取るように銃弾を受けていたにもかかわらず死者はゼロ。その上全員気絶というお互いに話し合っていたとしてもできそうにない神業を連発していた。

「はい、そこっ」

ガガガガガッ。

両手に持ったハンドマガジンを自分の正面。いや、わずかながらに上へと傾け銃を乱射。放たれた銃弾は全部で二十三発。

ガッ、バキィッ。

最初の七発は手前にある木の枝や岩を砕き、後から放たれた銃弾の通り道を作る。

チュイン、ガガン。

次の三発は互いにぶつかり合い、そばにあった木の幹に設置されたナイフ。これは近くを通るとそのナイフにつながれた糸が切れてその通った人間に向かって飛んでいくという原始的な罠だった。設置されたナイフは砕け尚且つ、目標もない空間を通り過ぎて行った。

ガガガガガッがガガガン。

残りの十三発は大きな岩にぶつかり、亀裂を生みだしていた。ただし、その亀裂には現地の言葉でこう書かれていた。

選べ

その亀裂の横にはサカサを遠距離から狙撃しようとしていた男がいたが、自分のすぐそばを通過した銃弾、それに刻まれた亀裂の文字そして。

再びサイトスコープを見るとサカサが銃をこちらに向けて微動だにしていなかった。男はサカサが銃弾切れになっていることを知らない。こちらを見通せるわけがないと自分に言い聞かせるが、サカサはゆっくりと引き金を引くような動作をした。

そしてゆっくりと口を動かしていた。それは岩に書かれた文字と同じ。

え・ら・べ

サカサに照準を合わせた男は銃から目を離し、両手を上げた。サカサが自分を捕縛するまでの間、微動だにすることが出来なかった。

「ロケットランチャーまで持っていやがったか。まあ、こんな鬱蒼としたジャングルじゃ使えないけどな。とりあえずもらっていくか。ミネルヴァ、周りに敵はいないな？」

「イマセン。サカサ」

「よし、今日はもう寝ていいぞ」

「リョウカイ」

「わ、わかった言う。言うから！」

「で、どこだ」

「そ、それは…」

ズドンッ。

男が一瞬言いよどむとサカサは躊躇うことなく男の右腕に先程発砲した銃を押し付け発砲する。

「次は左だ」

ジュウウ。と音を立てながらサカサは左腕にまだ熱を持っている銃口を男に付きつける。

「み、港だ！王族専用の船着き場だ、そこにオノト王子はいる！王の石を使う気だ！」

左腕や火傷の痛みをはるかに超える恐怖が男の口を割る。

「そうそう。最初からそう言えばいいんだよ屑が」

全く使えん馬鹿だな。と、ため息をつきながらサカサは男たちに背を向け洞窟の奥へ数歩だけ歩いていく。

そして、

「おい、もういいぞ。こいつらは動けない、好きにしな」

洞窟の奥には十にも満たない小さな子供たちがいた。皆、ここに

昔から住んでいる現地民族の子供たちだった。そしてこの子たちは皆、目の前にいる兵隊に親兄弟を殺されたという経験者たちだった。

「この子たちはお前ら屑どもが嬉々としてとして殺した人達の家
族達だ。約束通りここに連れてきたぞ」

サカサは子供たち一人一人にナイフや粗く削った木の杭、先程奪った小銃などを子供たちに渡す。

「さあて、ちびっ子達。あいつらがお前らの親を兄弟を撃ち殺した奴らだ。今なら身動きは出来ん。さて、後は好きにしていぞ」

サカサは子供たちの背中を軽く叩きながら右から順番に捕縛した男たちを指さしていく。

「マーベス、エルカ、トレト。あいつがお前らの父ちゃん母ちゃんを戦車砲で吹き飛ばした奴だ」

「んんぐ」

「トット、ミンファ。あいつがお前の姉ちゃんを目の前で無理矢理犯した上にダーツのように猟銃の的当てゲームのように銃殺したやつだ」

「むうぐ」

「キミリ、ウォレン、クオ。あいつがお前たちの兄ちゃん、一番下の妹、ベルセおじさんをただすぐに道を譲らなかつたというだけで撃ち殺した奴だ」

「つむむぐつぐつぐ」

「ユト、テレ。あいつをよく覚えてるだろ。お前の父ちゃんと母ちゃんの必死の命乞いを高々と笑い通して生きたまま虎のえさにした。男だ、あいつは口が開いてくるかもしれないから俺が抑えてやる」

「ひ、ひぎいいいいい！」

男たちは怯えていた。サカサの鑑定眼に、これまでの行動に、何故、この場所。いや、どうしてこのジャンルで我々を迎え撃ったのかも。すべてはこのためだということに。

サカサのスキル。千樹一葉は遺体を実際見たわけではない物。目撃情報や、被疑者の容姿や行動性格からも判別がつく上、サカサ自身うそ発見器よりも正確に相手の心理を読める。はったり、演技すらも見抜くこのスキルを前に映るのは真実。

しかし、それでも見通すことが出来ないものがあることも事実。サカサでも持ちえない情報を有したもの、文字通り 知ることのできない、こことは違う世界 だけ。

今のところ恐竜の時代よりもさらに深い地層で見つかった黒の大剣、避来矢。

避来矢より浅い地層で見つかった割れた水晶玉ミネルヴァ。

そして、その二つの地層の上に祭られるかのように鎮座していたオルストーン（本編ではジュエルシード）など文字通り異世界の物に限られる。

「安心しろ。ここには俺とお前等しかいなかった。死体も全部ここにいた猛獣が全部かたづける。ユト、テレ。お前たちの親みたい。こいつがやったように」

サカサは先程まで尋問していた男の頭を上から押さえつける。目の前にいる子供は五歳にも満たない小さな子供たちだ。二人とも涙を流しながら男を睨みつける。手にした銃の引き金を握り、男の目に押し付け、力いっぱい引こうとしている。だが、安全装置の外し忘れと子供の握力では引き金を引くということはあまりにも重すぎた。

「どうした。お前たち？殺さないのか？…ああ、そうか」

兵隊である男たちはこう思った。ああ、殺せないんだな。それでいい。お前たちの家族はそれを望んでいないと。日本人特有の甘ったれな平和ボケが出るんだと。しかし、同じ日本人でもサカサは違う。氣に入った奴ならどこまでも甘くなるが氣に入らないやつには躊躇いがなくなる。

「人を殺す方法はな、こうやって…」

サカサは懷から子供たちに持たせた銃と同じものを取り出し、小さな子供に箸の持たせ方を教えるようによく見えるように安全装置を外し、先程まで尋問していた男の額にその銃を両手で持ち、押し付け、引き金に指をかけた。

「こう撃つんだ」

タアン。キン、キキン。

銃声、薬きょうの落ちる音が洞窟内に響き、そして、先程まで尋問を受けていた男は首の後ろから血が噴き出しながら音もなく倒れた。

「……………つつつ！！」「……………」

子供たちは体を一瞬振るわせて皆、持っていた凶器を落とした。中には気絶する子供すらもいた。

「なんだ、その顔は。まさか、殺そうとした相手に本当に殺されるなんて考えているのか？残念だがお前たちは生きている価値もない。不快すぎるから死んでくれ」

サカサは捕縛した男たちを睨みつける。サングラス越しでは意味がない。しかし、サカサは最初から今までずっと同じ表情で男たちと対峙してきた。

「…ちびども。殺すのが嫌なら俺がこいつらを始末する。この洞窟から出る。そしたら海につながる道を歩いていけ。浜辺に止めているヘリに乗り込め。安全なところまで洞窟の外にいる姉ちゃんを送ってくれる」

サカサの言葉に子供たちは一人。また一人と出ていき、気絶した子供はいつの間にか洞窟の外で待機していたサカサの部下が背負って出て行った。洞窟内にはサカサと捕縛した男たちだけになった。

「…さて、子供たちの結果は出たから俺も片づけるか」

子供がいなくなったのを確認。少なくともこの近くにはいない。今から起こることは全く関係のないところまで行ったことを想定してサカサは残る三人に向かって引き金を三回引いた。まるでごみを捨てるかのように。

タン、タン、タン。

??? サイド

…うう、あ、く、口と鼻がいてえ。…痛い？痛い痛い痛い。

あ、あああ、俺は生きているぞ。

あの日本人。ミスリやがった。俺を殺し損ねたことをたつぷりと後悔させてやる。まずは同じような目に合わせたうえで…。

「ううう」「おおお」「がああ」

周りでうめき声が出たと思ったらほかの三人も生きていた。俺以外はみんな足を撃たれていて動けないのか、足には汚いロープで止血されていた。しかし、誰もが何かを訴えている目をしていた。猿轡は外れていない。が、あまりにも稚拙な対応に笑いが込み上げる。あの男散々なことを言っておきながら殺せていない。しかも…。俺と三人との距離が同じくらいの距離、洞窟の入り口の付近に光る物を見つけた。

月明かりが洞窟入口に佇んでいる白衣を照らしていた。その白衣は居眠りをしているかのように右に左に揺れていた。

俺はこれ以上とない幸運に巡り会えたようだ。

日本人だこいつも。甘すぎる。この状況なうえに俺とあいつの間には刃渡り十五センチ以上のナイフと機関銃が一つずつ置かれていた。その下には手紙があり内容があまりに甘い言葉を連ねたものだった。

馬鹿どもへ

子供たちに免じて一度だけ見逃してやる。次に誰かを殺そうとしたらお前たちは自分で自分達を殺すことになるだろう。このナイフと機関銃はこのジャングルで身を守るための道具だ。間違った使い方はするなよ。俺がお前らに行ったことを忘れるな

間違った使い方？見逃す？守る？だから甘いんだよ日本人！

俺は音もなく俺は正しいナイフの使い方を行うためにナイフを音もなく拾う。機関銃は重いうえにどうしても音が出るから。そして音もなく白衣の後ろに移動。白衣は相も変わらず左右に揺れていた。そして、勢いよく白衣を貫いた。

どんっ。どすどすどすどす。

一撃を加えた後、何度も何度も刺し、ついには奴の返り血で俺の体は血で真っ赤に染まった。血の匂い。確実に奴を仕留めた。馬鹿が、どんな面をしているか拝んでや…。

「な、な、な」

俺は一瞬、体から内臓が全部なくなってしまうたかのような感覚に襲われた。

馬鹿め

白衣の襟首をこちらの方に向けると、そこにはあの日本人そっくりのかつらをかぶせた人形。その顔には俺たちの言葉でそう書かれていたカードが張られていた。そして、その人形が持っていたプラスチックカードそこにはこう書かれていた。

二度はない

ピンツ。

白衣の後ろからではわからなかった位置にずたずたの輸血パックが人形に接続されており、その輸血パックについていた黄色い糸が切れた。慌ててその黄色の糸が張っていた先を見るとそこには奪われた口ケツトランチャーに接続されており糸が切れると発射される仕掛けになっていた。

俺が倒れていた場所、ナイフ、白衣の人形、輸血パック、ロケットランチャーの位置づけは一直線となっていた。つまり、俺が白衣を刺すと、輸血パックの中身が吹き出し、その圧力で糸が切れる。目の前のロケットランチャーは発射される仕組みだった。

ド
シ
ユ
ツ
。

俺は発射されたロケットランチャーを奇跡的に躲した。そして、山の中腹から転げ落ちていった。

[illegible]

悲鳴が洞窟内に数瞬響き、そして、爆音が鳴り響いた。

ドッ
ゴ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
ン
ッ。

爆炎のすぐに、洞窟は崩れ落ち、中にいたであろう三人はサカサの手紙通りの末路となった。

三人の男たちはある理由によりロケットランチャーの存在を知つ

ていた。それは、罨を仕掛けた本人。サカサが予め教えた。尚且つ、忘れてもいよいよに洞窟の天井に書いてあった。

目の前の白衣を撃つたり、刺したりしたらロケットランチャーが発射されるぞ

男たちはそれを伝えたかったが山中を転がり落ちていく男に伝えることなく爆風の中でその命を吹き飛ばしていった。

山のふもとまで転げ落ちた男は両腕を折りながらもなんとか生きていた。が、

「う、うああああ」

そこには二匹の虎がいた。そう、山のふもとには虎の巣があった。今は子育てシーズンで警戒心が全開の時期。そこに血まみれの状態、血の匂いを纏わせた状態で飛び込めば…。もうわかるだろう。彼の末路が。

「う、うあああああああああああああああああああああああ
ああああっ！！！！」

夜のジャングルに一人の悲鳴が高々と上がった。

第一話 サカサのレアスキル。（後書き）

あとがき

サカサ「…大丈夫か？これ？」

たかB「た、たぶん」

ミネルヴァ「ヒツカカリソウ。イロンナモノニ」

サカサ「一応、これ、リリカルなのは二次？小説なんだよな」

たかB「い、一応。次は魔法が出るよ？」

ミネルヴァ「サカサ、ニヒツヨウ？」

たかB「ひ、必要ですよ。いくらチートな主人公でもどんな効果がある攻撃かわからないと対応できない仕様です。残りの魔法はそれを補助するものですから」

サカサ「それって、チートすぎないか？知ったらスキルの併用も合わせるとどんなことしても対応できる。ということになるし」

たかB「そうでもないぞ。例えば直径五十キロの隕石をぶつければ」

ミネルヴァ「サカサ、ナラ、カクミサイル、デタイオウ、シソウ」

サカサ「まあ、ハッキングすればできないこともない」

たかB「できるんだよな。まあ、自分で作ったキャラなんだけど…。それでもダメージくらいは与えられる」

ミネルヴァ「チキュウニ？」

サカサ「つまり、わかっていても避けられない攻撃をすれば通る。無茶苦茶攻撃範囲の大きい奴とか早い攻撃とかなら」

たかB「はい、そうですその通り。先読みしてもそれだと回避できません。まともに食らってください」

サカサ「まあ、そうなる前に何とかするさ」

ミネルヴァ「ジカイ、ヨコク」

サカサ「サカサの毒。て、スキルの後が毒かい」

たかB「オリジナル魔法も出るよ。不定期になるので次回更新日は未定です」

第二話 サカサの毒（前書き）

月に一話のペースで投稿。いずれは、リリカルなのか？無を有する剣。と合流させますんで。相も変わらず、マジカルな要素少ないですみません。

第二話 サカサの毒

ズズン。

闇夜に響く地響きにサカサはため息をついた。

「…やっぱりか」

何となくわかっていた。自分がジャングルで追いつめた兵隊の末路。自分のスキルで見抜いた彼らの行動原理。自業自得ともとれる結果に。

そして、目の前に広がるこの国の一個小隊の残骸。それは炎と流血。木と鉄。そして人肉の焼かれた匂い。従兄弟のツルギが見たら卒倒しただろう。

戦車の砲台は上半分が吹き飛び、土囊は崩れていないのにその陰には幾数人ものの兵隊達。最新のガトリング砲や機関銃。防弾服においてはその関節部分や構造上弱点となる所はすべて一発の鉛玉で破壊されていた。

サカサは最初はたった二丁の拳銃だけでこの国の土地へと踏み入れた。ここにリオストーンというオーパーツがあるという情報を自分の作り出した組織の人間に聞いて単身で乗り込んだ。

「…俺は、こんなことの為にここを整備したんじゃないんだけどな」

赤と黒に染まりあがった景色を眺めながらサカサは再度ため息をつく。

元々、この国は小さな島国。地図にも乗らない島がいくつも集まってできた発展途上の国である。この国には王制が敷かれていた。

ここの王様とはツルギを実家から連れて行く前に知り合い、地元料理をこちそうになった。この島国の歴史・文化はあまりに幼いが、ここの住人はとても穏やかだった。それ故にサカサは医療技術だけを伝え、この島の風土と人に無理な発展は望まず、世話になったお礼として、一つの医療事務所を建て、この国を去った。もちろんパソコンと自家発電機。ボタン一つで自分の組織の人間につながり必要な医療技術は地元で採れる薬草の調合法だけ伝えられる。余計なものなど入れるつもりはなかった。だが、

ダン。

廃墟と化した医療事務所の中でサカサは表に向け、ここの兵隊から奪ったライフル。それは遠距離狙撃用であつたがサカサは壊れたパソコンに目を向けながら引き金を引く。

「……があ」

事務所の周りを囲む炎の向こうから誰かのうめき声が聞こえた。狙いも何もつけていない。すべては想定したうちの一つ、そのうちの条件を満たしたからこそ撃つた。自分のスキルで分かる、環境の微々たる変化。それは、音であり湿度であり、匂い、磁気。肉眼では見えない小さな微粒子が自分の五体を通して教える。半死半生の兵隊のうちの一人が圧倒的な大打撃にもかかわらず自分に逆らつたという条件に。

「……つくづく嫌になるぜ。くそつたれ」

医療事務所の外にいる兵隊は島の住人とそうでない者。住人だった者は性格に難あり、言ってみれば札付きの悪やマフィアといった悪党。中にはここの住人でありながらここの生活・待遇に満足でき

ない高官だった。そして、そうでない者はいわゆる傭兵だった。

しかし、気になるのはここまでの兵力をどのように集めたかだ。

本来、この島は漁業と農業、そして近くの諸外国を通しての観光業であり、原始的な生活が生活基準となっていた。だからこそサカサは無理な開発はせず、彼らの生活に支障をきたさない程度の医療技術だけを残していた。それにもかかわらず、ここには人を殺す最新の設備が整っていた。そのような財力や人脈とは無縁のはずなのに。その上、この島の住民のほとんどは虐殺されていた。ここにはそんなことをする必要がないにもかかわらず。それともこの国に虐殺を行うほどの価値が生まれた？

「ミネルヴァ、起動。連泊の矢。及び青蛇射出。ここ半年の細やかなデータを抜き取れ。些細なことまで全部だ」

「了解、サカサ。レンパクハツシャ、アオヘビハツドウ」

サカサは懐から琥珀色の水晶。ミネルヴァを取り出すと同時に指示を出す。

指示を受けたミネルヴァは次の瞬間には左腕を覆う白いガントレットになる。左の甲には小さなボウガンが張り付いており、そのボウガンから白い光が発射され、壊れたパソコンにあたる。その数瞬後、同じく左手の甲についている赤、青、黒の三色の小さな宝玉。そのうちの青の宝玉が色あせてガントレットと同じ白に染まる。

「セツゾク、サカサ、データ、ロード、オーケー？」

ガントレットとパソコンをつなぐ白の光は青く染まり、機械的な声で、ミネルヴァはサカサに確認を取る。

「…ああ、問題ない」

まるで耳元で人が絶叫しているような耳鳴り、脳みそを掻き混ぜるような頭痛。そして、目に映る様々な数式とアルファベット。サカサは自分のスキルを嫌でも使う羽目になる。

怪我した住民の手当てを行う現地の医者。銃声。手当てを受けた患者の笑顔。燃える住宅。たまに行う王様との謁見や行事。大けがを負った住人。国全体での小さな豊漁祭。薬の在庫切れ。王様。ジヤングルへ向かう原住民。軍隊。海の間こつから来た鉄の船。子供の笑顔。火を噴く筒。笑顔。王とその叔父。麻薬。青い海。虐殺。赤い空。強奪。黒く染まった町。強姦。泣き叫ぶ母親。悲鳴。最後まで立ち向かった父。猛獣。絶望の中兄弟を逃がした姉。麻薬。青い石。狂気じみた笑い声。空を飛ぶ鳥。ミサイル。賄賂…。

もう…十分だ。

「シャットア、ウト」

ちなみにミネルヴァにも負担があるこの青蛇。流暢な喋りがカタクトになり次第にとぎれとぎれになる。今日はもう打ち止めか。

「ミネルヴァ、もう寝ていいぞ」

「ラ、ジャア」

ジヤングルでの敵の位置の索敵、自分の能力の補助、今回の検索などミネルヴァのやっていることはミッドチルダにあるデバイスに比べればあまりにも少ない。だが、その少ない情報はサカサに明確な目標を与えた。

「…ち、やっぱりオーパーツか」

情報の中に検索した中に三か月前に突如とあらわれた怪物ともいわれる幻想上の生き物。

上半身が牛で下半身が男のミノタウロス。

下半身が魚で上半身が美女のマーメイド。

どれも人を襲い食らう化け物。それを止む無く殺害した。その亡骸の中に部下の報告から出た青い石。サカサはこれをリオストーンと呼んでいたが、のちにジュエルシードと呼ばれる願いを曲げてかなえる摩訶不思議な石。今、現在確認されているので三つ。二つはツルギの持つ剣。避来矢に浄化されている。これは願いを曲げずかなえることが出来るための浄化。まあ、ツルギには伝えていない。伝えれば使いたくなる。現に自分がそうであるから。

三つ目はミネルヴァに使った。

サカサ自身の知的欲求。遺跡の下から出てきた避来矢・ミネルヴァ・ジュエルシード。これが何なのか知りたい。その欲求にジュエルシードが反応。

一時暴走状態に陥ったがサカサはそれを危険と判断。当時、一緒にいたツルギと研究員たちを逃がして、ダイナマイトで遺跡ごと爆破し再度掘り返した時には、避来矢には何の変化はなかったが、ミネルヴァはその透明な色を琥珀色に変え、以前のデータを失いながらも起動を果たした。ジュエルシードは粉々になり、その中に蓄えられたエネルギーはすべてミネルヴァへと流れ込んだのが原因とみられる。

「…ヤコマ王か」

自分も犯したことがある事象に悪態をつきながらもこの事件の全貌が見えた。

ジュエルシードによる麻薬の原料となる花が異常発生。地図にも

乗らない島で群生するこの花はまだ世界的には認知されてはいない。島の人間はこれを昔までは薬草とつかっていたがサカサがこれを麻薬と断定し王に提案、王の名においてこの花は一時、全滅したと思われたが。

それを良しとしない者がいた。当時の王の叔父にあたるヤコマという王族。王とその娘、その次に権力を持つ彼はこれをもとに商売を行い発展を望んだ。サカサもこの時はどうでもよかったのだが王とその娘はその危険性を無視できないと判断。周りの支持も得てこの花の処分を決定。最後までヤコマ王は処分に反対していたが結局覆ることはなかった。

そして、サカサがこの国のを去つて一か月後、浜辺に流れ着いたジュエルシードを拾つたヤコマ王は自分が権力を握りたいと常々願ひ、それを叶えた。麻薬の花の復活という形で。

ヤコマ王はその花で密売を繰り返し、自分の味方を増やし、傭兵を雇い、その花を使い傭兵すらも手なずけ、国家転覆をはかった。サカサが再びこの国に来た時にはごろんのありさまということだ。

「く、くは、くははははははははははは」

誰一人としてサカサの狂気を見る者はいない。
見たものは皆、サカサの狂気の餌食となっているからだ。

バジリスク。

幻想の生き物でその姿はトカゲにも似てしていると云われている。サ
カサが裏の社会で呼ばれている二つ名でもある。

その鱗はあらゆる妙薬になり多大の富と繁栄をもたらす。

が、逆に。

その瞳に魅入られたものは即死に至る。

その息はそのあたりに群生している植物を枯らす。

口にした川の水は猛毒となってバジリスクがいたことを証明する。
敵に回してはいけない存在。それがバジリスク。

歓喜した。殺しても殺したりない人間の出現に声を上げて笑い続けた。暴君を殺しても誰も文句は言われない。

いや、殺しはしないし死なせはしない、死よりも重い罰をくれてやる。最高の食事を行う。前菜は悲鳴、オードブルに絶望、メインディッシュに望まぬ生を。ヤコマお前にくれてやる！

燃え盛る炎の島。それを背中にサカサは港に残っていた船を一時間で改良・修理を行いヤコマ王のいる火山を有した島へと向かう。船は自動運転に設定し五時間後に上陸するであろう島までサカサは休眠を取った。島で出会い、笑いあった、二度と会うことのできない人たちの夢を見ながら。

ヤコマ王。お前は俺の目に留まった。

サカサは上陸した島で爬虫類のように口元をなめた。まるで、獲物を見つけたバジリスクのように。

第二話 サカサの毒（後書き）

あとがき

たかB「だあらっしやあああああつい！」

サカサ「シリアス嫌あああああ、と言いたいのか？」

ミネルヴァ「ジャアカカナケレバイイノニ」

たかB「いいんじや、たまには人の不幸を書きたいんじや！しかも俺の欲求を満たすような」

サカサ「俺が言うのもなんだが、いい趣味しているな」

たかB「エロよりグロ！」

ミネルヴァ「チョット、オハナシシヨウカ」

サカサ「わからんでもない！」

ミネルヴァ「…ハア」

サカサ「しかし、現地調達という名の武器強奪で一個小隊壊滅。その上、島一個炎上とは。まあ、ジャングルには被害を出さなかったという設定があるがバイオでハザードな展開だな」

ミネルヴァ「トイウヨリ、トウコウヘイハイナカタノ？」

たかB・サカサ「いないよ」

ミネルヴァ「ナゼ？」

サカサ「そう仕向けるように挑発したから」

たかB「悪・皆・即・斬。白馬な王子様（將軍様）が好きだから」

ミネルヴァ「……ハア」

サカサ「今回の青蛇。あれはぶっちゃけ、マジカルなハッキングコードみたいなもんだな」

たかB「ま、ね。ちなみにレイジングハートやバルディッシュに接続して自爆コードを送るなんてことも可能」

サカサ「凶悪だな。おい」

ミネルヴァ「ソノマエニ、マリヨク、ホウシュツデ、レンパクノヤ、ガ、キレル」

サカサ「相手も黙ってやられるわけがないだろうし。…凶悪なのか？駄目なのか？」

たかB「まあ、原作キャラ相手にだと駄目だな。無抵抗なデバイスがいたら別だけど」

サカサ「おい」

たかB「次回はヒロインとしてあの猫を出すよ。予定では」

ミネルヴァ「…ナンビキモイル」

サカサ「時間軸的にはリリカルなのは無印だから…あいつか」

たかB「題名は未定です。だって本編もあまり進んでないし」

ミネルヴァ「ニジナノニ、ホンペンモナニモ、ナイ」

サカサ「まあ、一か月後くらいには書けている予定だ」

たかB「気長に待っていてください」

第三話 サカサと姫と猫。（前書き）

ひゃっはー。

かなりの間を開けての更新だぜ！！

すいませんかなり反省しています。

ほぼオリジナルリリカルなのはストーリー！。

世界観ぶち壊し。もう一つのお話の外堀を埋めるだけのお話なのに・
・。

なんでかな、こっちの方が達成感があるのは。

第三話 サカサと姫と猫。

ドッゴオオオオンッ。

「第三、第五ブロック半壊。いえ、爆砕されました！」

地面を揺るがす爆音を皮切りに。様々な監視区域で爆発音が鳴り響く。

「こちら十七部隊、え、援護を……」「おい、応援はまだかつ！」
「侵入者は一人なんだぞ！」「第七から二十三番ブロックで捕えていた原住民の反乱。……そんな、施設機能奪われました！」「エラー？！なんだこのコンピューターウイルスはっ、あらゆる防壁を突破して……」
「駄目です！通信機器及び一番から三番部隊以外を除いて全部隊交信不能！」
「隊長、返事をしてください、隊長！」

指令室の中ではまるで全世界から交信の妨害を受けておるかのよう
に遮断され、情報以外にも物理的に攻撃されて今や国全体に配置した傭兵や自分の部下たちは散り散りになって逃げだそうとしている。
が、

「そんな、空港、港、海底トンネル、シェルターまで現地住民に抑えられました！」
「……なら、屋上のへりで……」
「駄目です。たつた今、ミサイルで轟沈しました！」
「何だというんだ、我々は軍隊を相手しているのではないぞ！」
「映像来ますっ」「な、本当に一人だというのか」

ノイズが入った映像に映し出される白い影。それが逃げ出そうとしていた傭兵たちの脚を撃ちぬき、武器を強奪。施設を破壊し、格

納庫にある戦車や火薬庫を爆破。更にこの司令塔へと向かってくる。

「手に持っているのは…携帯電話?! しかも、文字を打ち込んでいる?! どこにそんな余裕が…」 「最終防衛ライン突破。目標A、この施設に突貫してきます!」 「防衛システムは!?!」 「駄目ですつ、二時間前から起動しません! こちらへとつながる防衛扉一向に閉じませんつ!」 「トラップ及び施設内カメラエラー?!」 「そんな、なんなんだ、このウイルスは!」 「ウイルスの発信源を特定! …え、嘘!」 「どこからだつ!」 「…です!」 「何だと、もう一度言え!」 「ですからあの白い影の人から。正確にはその人の持つ携帯から発信されているんです!」 「なんだと?! この設備は最新鋭なんだぞつ!」

モニターが一時黒く塗りつぶされると再び映し出された映像には、すでに三番隊と二番隊の半数が周りに転がっていた。彼らを見定めるかのように白い影は数人の隊員から小銃を何丁か奪い、再び走り出す。

次に白い影が映し出された映像に我々は愕然とした。狭い路地でロケットランチャーを放ち、十数メートル先にある扉。この指令室へとつながる扉を爆破する姿に。

ズガアアアアアアンツ。

轟音と共に扉が砕け散り土煙が舞い上がる。指令室にいた我々は銃を片手に入口へと発砲を試みる。

銃弾が土煙を払うかのように放たれ、土煙がはれると皆再度銃に弾丸を詰め込む。だが、

かん、かかかん。
バシユツ。

指令室に暴徒鎮圧用の閃光弾が投げ込まれる。

一瞬の閃光。しかし、それで三割の傭兵及び司令官が倒れ、

シューウウウウウウウウウ。

「がはっ、こほ、こ、これは」「し、痺れ薬」「ま、マスク。マスクの装着を急げ!」「…あ、ああ」「こ、こんなことがあったま」

同時に投げ込まれたガスにより我々指令本部を守る傭兵一味はものの三分で鎮圧されていった。

サカサ視点。

「…これが最新のデータか」

コンソールパネルをいじりながらサカサは最終目標のヤコブ王とオノト王子の現所在地を調べる。ヤコマ王かそれともオノト王子かが今回の主犯である。だが、おそらく犯人は。

「オノト王子だな」

ヤコマはせこいが勝てる勝負しかない臆病者。それに対してオノト王子は相手と自分の力量もわからない馬鹿である。息子にそのかされて親が打って出たのかそれとも、二人ともジュエルシード（リオストーン）を手に入れて調子に乗ってことをおこしたかもしれない。現時点では自分のスキルでも判断はつけにくい。情報がま

だ少ない。

オノト王子は一度会ったことがあるが、あれはいわゆるHIKI KOMORIというやつだな。

一度も運動をしたことがないようなブクブクとした体。出す声は不満だけの人間。

才能もないくせに、努力もしていない。ただ、生まれが王族だったからとこのことで働くことなく衣食住を約束されている。そのはずなのにそれだけは飽き足らず、自分の親父の尻馬に乗り好き勝手しているようだ。

・・・ん？このデータは。

「エル姫と・・・猫？」

ヤコマの姪であり、前王の娘。エル姫の写真だった。

なんで、こいつが最重要目標？捕獲目的は・・・オエツ。

キモ王子が考えることはわからん。なんで身内の写真隠し撮りして悦に浸っているんだ。

まあ、これで分かった。つまり、エルを捕まえてレイプがしたいというわけか。従兄妹だろ、お前。別に従兄妹間で恋愛は大いに結構だ。しかし、オノト王子のことを少しでも知っているものが見たら吐き気を催すこと間違いなしだ。ああー、気持ち悪い。

対して、エル姫は褐色の肌に黒髪を頭のでっぺんで二つに分けている。黒のツインテールという髪型だ。赤い瞳がルビーのように美しかった。が、今頃その瞳は憤怒に染まっているだろう。

それよりおかしな点が。

一緒に映っているこの黒猫。尻尾が二本？

合成写真ではないようだ。しかも、この黒猫は殺害目標になっている。

殺害理由は・・・。

ほう。

これは少し面白くなりそうだ。

そう思いながら俺は自分の唇が上向きになるのを抑えきれないでいた。

それから、搾り取れるだけの情報を搾り取りこの司令塔を後にした。もちろん、迎撃プログラムのジャミング。およびまだ制圧されていない状態のダミー映像を発信した。迎撃プログラムの対象も原住民から余所者（俺は除く）に変更した。

中にいた傭兵たちはふんじばってトイレの便座に顔を突っ込ませてやった。これで脱水で死ぬことはない。心は死ぬがな（笑）。

一応、司令塔は解放した現地の住人に任せながら、エル姫について何か知らないかと尋ねたらエル姫は猫とわずかなお供を引き連れて凶王ヤコマとオノトを討ちに行ったとのこと。俺もその後を急いで追うことにした。

二人とも俺が行くまで何が何でも生きていろよ。

サカサが司令塔を離れると同時に日付が変わった。

サカサがこの国に来てから二日目。

それはちょうど前国王が暗殺されてから一週間ほどたった日付であり、この日が新国王最後の天下日となった。

???視点。

ドン、ドオオオオオン。

私、エルは協力してもらった現地の皆さんに守られながらも叔父であるヤコマ。従兄弟であるオノト王子がいる宮殿。正確には宮殿に隣接しているジャングルから外の様子をうかがっていた。

（エル、見張りは五人。だけど、もう少ししたらあいづらもいなくなりす）

（ありがとう。リニス）

頭の中に響く声に私はお礼を言った。

声の主はリニスという使い魔。外見は猫そのもの。

元々は違う所。異世界にいたと本人は言っていた。

リニスに初めて会った時、彼女は既に息も絶え絶えで今にも死んでしまうのではないかと思った。

リニスは私に会うなり、「…フェイト？」と呟いたが私はその弱い姿に耐え切れず、前王だった お父様に内緒で自宅に運び入れた。

そして、リニスは私と契約を結んでほしいと懇願してきた。契約をして新たに魔力を供給すれば生きながらえると。彼女曰く、私はその魔力を持っていたらしい。

魔力がどういうものかわからない。だけど、命に危険が及ぶものでないのならと契約を結んだ。そして、契約を結んだリニスは元気になった。

リニスはいつか私とよく似た女の子フェイトという子に会いたいと言っていたので合わせてあげたいとも思った。そんな矢先。

お父様が暗殺された。

それが叔父と従兄弟のオノトによるもとと知った時、私は国で唯一他国と交流が多い島にいた。その知らせをリニスから教えてもらった時、私は信じられなかった。このまま狂ってしまうのではないかと思った。

それでもリニスがいたから私は逃げ通すことができた。

お父様の暗殺から一週間。

私は信用できる者たちを引き連れオノト王子の暗殺に向かった。
しかし、それも昨日まで。

もう私はリニスしかない。残りの皆は私をここまで連れて行く
ために力尽きていった。

それでも。

それでも叔父のしているこの国政は許せない。

お父様を殺されただけでも許せないのにこの国の住民。守るべき
国民すらも傷つけてそれを黙認するだけでは飽き足らず今ものう
と玉座に座っている叔父を許すことは出来ない。オノト王子も同
類だ。

私ははやる気持ちを抑えてあちこちで爆音を鳴り響かせているジ
ヤングルの茂みの中から宮殿の様子をうかがう。

この爆音の正体は島のあちこちでお父様を支持する国民が現王制
に反旗を翻したものだ。最後のお供の方から聞かされた。この混乱
に乗じて叔父と従兄弟を倒す。

リニスは私より先に宮殿の周りを確認するため、猫の姿で先行し
ている。

あとはどうにかして見張りを追い払い宮殿の裏口から強襲を仕掛
けたい。

(…私がやりましょうか?)

(駄目だよ、リニス。もう、転移する魔力もないでしょ。猫型の
状態で状況把握だけでいいよ。それにリニスはもう活動するのに限
界なんでしょ?)

(それは…)

リニスはここにたどり着くまでに何度も魔法という不可思議な現象を私たちのために使った。

それは傷口を塞ぐことから任意の場所へ一瞬のうちに移動したり、飛び交う銃弾を不思議な光の盾でふせいだりもした。しかし、それを行うたびリニスは疲労を見せていた。

そして今日も三回ほど使ってもうフラフラの状態だった。

そして、今はエリアサーチという自分を中心に半径一キロの様子を上空から眺めているような感覚にしてくれる魔法を使っていた。

（魔力の少ない私との契約じゃ、これぐらいが限界だよな）

（そんなことはありません、エル！私が…）

（うん。だから無理はしないで）

（…エル。…あなたは本当にお優しいですね。フェイトにそっくりです）

（ふふ、嬉しいな。じゃあ、この騒動が落ち着いたら、そのフェイトに逢ってみたいな）

（驚きますよ。本当にそっくりなんですから。っ、エル！後方五百メートルからそちらに高速で近づく人影が！）

ドオンッ。

発射された銃弾が私の耳の肉を少し抉って身を隠していた茂みの枝を折った。

私は痛みよりも先に後ろを振り向くと百メートルもない距離に叔

父の雇った二人の傭兵がこちらに向かって銃を向けて走ってきた。

「動くな！」

「うあつ」

男たちの太い腕に私はいとも簡単に口を塞がれ、捕まる。

私はこんなにも弱いのか？こんなにも簡単に捕まってしまうのか？私はお父様の敵も討てずに…。

「ちくしょう！どうなってやがる！あの白衣。本当に学者なのか！？」

「おいっ、黙ってる！ここいるってことがばれたら」

…あれ？

傭兵たちの様子がおかしい。

私を捕まえに来た。というよりも何かから逃げている最中のように見えた。

「くそ！援軍はすぐにやられちまうし、本部からの司令は滅茶苦茶だし、何が何だっというんだ！」

「おいっ、いい加減静かにしろ。これ以上騒がしくしたら奴に感づかれる」

（エル！すぐそこに行きます！待っていてください！）

私の異変に気付いたのかリニスが急いでこちらに向かってくるという念話を行いながら私は拘束している傭兵に声をかける。が、そ

れは間違いだった。

「あ、あなたたちは一体…」

「黙ってる！」

ゴツ。

先程発砲した拳銃で私の頭を殴りつけて押し倒すと、銃口を私のこめかみに押し付けて声を荒げる。

「お、お前か。お前があいつを呼んだんだな、そうだ、そうに違いない！」

「おい、よ」

恐怖に駆られた傭兵の目は焦点が合っておらず全身を振るわせていた。そして、もう一人の傭兵に止められる前に振るえる指で私の頭に押し付けている拳銃の引き金に指をかけ、そして。

ガオンッ。

その指ごと引き金を吹き飛ばされた。

「ぜえぜえ、そいつは頂けないな。おうえっ、そいつには話があるん、ごほっ」

息を切らせながら現れたサングラスをかけた白衣の男性に。あの人はお父様とお酒を飲み合った……。

「「ひっ」」

「悪いな。こっちは疲れているんだ。またあとで遊んでやるよ」

撃ちぬかれた痛みよりも目の前にいる男性に出会ってしまった恐怖の方が強いのか傭兵の二人は私を彼の方へ突き飛ばし一目散に逃げ出す。

しかし、その行動が読めていたのか、突き飛ばされた私を軽くかわして傭兵たちの両脚に白衣の男性は両手に持った拳銃で弾丸を撃ち込む。私は当然、突き飛ばされた方向に転んだ。： なんてかわすの？

さらに脚を撃ちぬかれ体勢を崩した彼らの首にめがけて体重を乗せた鋭い蹴りをお見舞いした。更に気絶した彼らの来ていた服を剥いでそれで彼らを拘束した。

「・・・ま、こんなもんか。おーおー、少し見ない間に大きくなつたなエル」

「・・・サカサ、お兄ちゃん？」

「おう」

鼻を打って少しすりむいたところを抑えながらいつもの白衣をまとったお兄ちゃんはいつもの意地悪そうな笑顔を見せた。

「何で避けたの？」

「あのな、受け止めたら貫通性の高い銃で二人ごと撃たれかねんだろ。映画や小説みたいに行儀よく相手が待つわけないだろ。しかも今みたいに事態が緊迫している状況で捕獲対象のお前を無傷で捕

まえるのは無理だな」

今度は呆れ顔で頭の後ろがりがり掻きながら答える。

その態度に私が文句を言おうとするとお兄ちゃん是我的傍までよるとしゃがんで私の頭を撫でた。

「…ま。無事で何より、だな。エル」

「・・・あ」

一年ほど前。宮殿の森で足を挫いて動けなくなったことがあった。お母様を早く亡くして、私にはお父様しか家族がいなかった。

周りの親族。つまり王族はこの小さな島々の覇権を陰ながら狙っている。それは外国の商人ですらも同じだった。下手に隙を見せればこんな小国など飲み込まれてしまう。

そんな中、自分の兄弟すらも敵だったお父様が私以外に本当の笑顔を見せた人。それが観光に来ていたサカサお兄ちゃんだった。

私はそれが嫌でお父様からお兄ちゃんを引き離したい思いで森に入った。

そこで足を挫いた。それから三時間もしないうちに恐怖と不安に駆られた。

身内からも、自分の部下からですらも牙を剥かれかねない状況でこんなことをすれば私は殺されたり政治的な脅迫材料に使われるんじゃないかと震えていた。

『エル、無事か！？』

そんな時に迎えに来たのはあちこち傷だらけになったサカサお兄ちゃん。…ではなく、お兄ちゃんに言われて出向いたお父様本人だった。

私がお父様につられて宮殿に戻った時、お兄ちゃんは当時反乱分子の恐れがあつた大臣と王族の数人。それを企てようとした海外の商人および大臣達を縄で締め上げていた。

『おーおー、お帰り。やきもち姫』

私は後に知る。お兄ちゃんは私がお父様を取られたと思いやきもちをやいた。そこで森で足を挫いて帰れないことを。お兄ちゃんは感じていたことに。

私がいなくなつて、十分もしないうちにそのことにたどり着くと同時にお父様に搜索を要求した。それと同時に反乱分子及びその予備軍の掃討を仕掛けることを。

まず、私がいなくなつたことを宮殿にいる全員に聞こえるようにやや大きめの声で説明する。次に私がいるであろう場所からそう遠くないところにいると想定して、搜索隊を出す。これはあまりにも関係のないところを指し示せば感づかれてしまう恐れがあるため。

そして、お父様本人には後から本当の場所を指定して自分を含めた少数で探しに行くように指示。そして、お兄ちゃん本人は私の変装をして先方の先回りをして芝居を行う。

後はこれ幸いと本性を現した反乱分子を一網打尽にするという算段だつたらしい。

私はすぐにそれについて抗議した。そうしたらお兄ちゃんは意地悪な顔でこう言った。

『悪かつたな、お前の大好きなお父様を取つちまつて』

それからお兄ちゃんの意地悪な顔はこの国を出るまで変わらなかつたが、この一件のおかげでお父様は周りの王族や海外の不徳な輩にけん制することができて私との時間も増やすように努めてくれた。

そのことに感謝するのはお兄ちゃんがいなくなって一か月後の事だった。

それなのに……。

「……ない」

「ん？」

「無事、じゃ、ない」

お兄ちゃんは私の顔をのぞきながら頭を撫で続ける。

お兄ちゃんは変わらないけど。私は、この国は、物凄く変わったやつたんだよ。

「お父様が。あん、さつ。リニスが、私。叔父に、連絡。私、知って」

「そうだったな」

言っている言葉がバラバラだがお兄ちゃんはずっと同じ調子で頭を撫で続ける。

私は今まで押し殺していた感情が溢れてきたのを抑えきれなくなつた。

「私、王族。頑張った。けど、叔父様。戦力、大きくて、勝てなくて。私はリニスと少しの臣下しかいなくて。皆、死んじやって、それで」

「エル」

いつの間にかお兄ちゃんの両手は私の両ほほを包んでいた。

その両手には私の流した涙が伝っていた。その両手は豆だらけとてもザラザラしていたが不思議と温かった。そして、その両手に力強さを感じながらお兄ちゃんと言った。

「遅れてごめんな。でも、お前とこの国ぐらいは助けてやるよ」

「でも、敵が、少なくて、強くて。私、消えそうになるくらい、強くて・・・」

私の言葉は相変わらずぐちゃぐちゃで言っている自分でも分からないのにお兄ちゃんは。

「だからどうした？俺は天才だぜ」

お父様とお酒を飲んでいた時と同じ顔。

私にやきもち姫とからかった時と同じ顔で。

「遅れた詫びだ。後はどうにかしてやるよ」

あの時と同じ、意地悪な顔で、優しい笑顔のお兄ちゃんの顔がそこにあった。

今思えば、お父様もこの笑顔に心を許したのかもしれない。だからこそ私は。

「あ、あああ、うあああああああああああああああああ
んっ。お兄ちゃん、お兄ちゃんあああああああん！！」

お父様が暗殺されて一週間。

私はお兄ちゃんに抱きついて、初めて感情のまま泣いた。

サカサ視点。

エルが泣いているのをなだめながらも周りの警戒を怠らない。

もう、敵対している勢力はあの宮殿にいる王族と傭兵の十人ほどであることはわかっていているが臆病者であるヤコマが増援を呼んでい
るかもしれない。一日二日でそうそう増援を見込める可能性は低い
だが、ゼロではない。

そんな時、目の前に小さな影が現れた。それは傭兵たちの暗殺対
象である二本の尾を持つ黒猫。リニスだった。

(…ミネルヴァ)

(リヨウカイ。サカサ。ジャケット、テンカイ)

懷にしまっていた水晶玉。デバイスのミネルヴァに念話で命じて
白のバリアジャケットを、左腕に小さなボーガンのついた手甲を装
着する。

右腕でエルを抱きしめながら左腕で猫のリニスに連泊の矢。光の
矢を放つ。

猫のリニスは突然のことに驚いたようだがその反応では躲すのは
不可能。

この後に 青蛇 を使って、初めて生体から情報を得ようとした
が。

ぱんつ。

(弾かれた?)

（ゲンイン、カイセキ。…ナンラカノ、デンジハノヨウナモノ、デ、レンパクノヤ、ガ、ハカイ・チュウワ、サレタ、モヨウ）

ミネルヴァからの連絡に次の一手を放とうとしたら頭に聞きなれない声が響いた。

（…念話。それにデバイス。もしやあなたは管理局に務めている魔導師ですか？）

（…ああ、誰が従事しているだ！俺はいつでもどこでもフリーだ！て、もしかして、お前か？リニス？）

俺の視線と思考を読み取ったのか目の前の猫が喋った。

「ええ、私です」

「サカサ。キュウデン、ヨリ、タスウノ、ネツゲン、ハンノウ、アリ。テツタイ、スイセン。テツタイ、スル？」

「え、誰？」

腕の中で泣いていたエルが急に聞きなれない声に驚いたのか辺りを見渡し始めた。

…この島に上陸して三時間。この島から出るための施設は全て潰した。

海運・防空システムもミネルヴァの ハッキング 青蛇 で国外から来たヘリヤ、この国から出ようとする機体はある機体以外すべて叩き落すように設定しているからヤコマとオノトが逃げ出せるとは考えづらい。一応、海外の海運空運関係には大嵐のため近づかないように発信は

している。密漁しようとして打ち落とされても文句言っなよ？

ここはいったん引いて体勢を立て直すのが吉か。それとも・・・。

「よし、一旦。あいつらが使っていた第十六補給陣営まで引くぞ。ついて来い。エル。リニス」

「え？え？」

「あなたは一体？」

「シツモンハ、アトデ。サカサニ、ツイテキテ」

「十時間後。宮殿に再度突入する。それで決着をつける」

俺は困惑するエルの手を引いて、戸惑いながらついてくるリニスを背中に感じながら、一度ジャングルを出ることを決意し、一度だけ馬鹿親子のいる宮殿を睨みつけその場を去った。

???視点。

『第十六補給陣営まで引くぞ』

くくく、バカな奴だ。

まさか、自分が捕えた傭兵の無線機がまだ起動していることに気づいていないだなんてな。

ここまで快進撃を続けてきたあのバジリスクもついに集中力が落ちたというわけか

「オノトよ、もう引き際ではないのか、このままでは…」

「大丈夫だよ。親父。この間抜けはご丁寧に突入時間まで教えてくれたんだからよ」

『十時間後』

宮殿の地下二百メートルに作られたシェルターの中に新国王と王子はいた。

丸々と太った王子に対してやせ形の新国王。二人の対応は体格と同じように違っていた。

新王になったヤコマはサカサの存在を知ってから慌てふためいていた。

バジリスクと呼ばれたサカサ。

彼の敵に回った以上ただで済むとは思っていない。三日前までサカサがバジリスクだと呼ばれていたことは知らなかったもののバジリスクの恐ろしさは十分に知っていた。

バジリスクと対峙した組織はすべて壊滅していた。物理的にはもちろん。社会的にはその悪事は世界中に公表され、信用を失墜させる。精神的には人格崩壊を起こすその手前で止め、またいたぶる。まさに生かさず殺さず。殺された方がましだという噂もある。

しかも、バジリスクの恐ろしいところはそのサングラスの奥にある瞳に睨まれた者たちの倒され方。

まるで示し合せたかのように自爆に追い込まれることが多い。

周囲を囲み銃撃を行っても踊るように弾丸を躲しその流れ弾で撃った者同士を倒す。

どういうわけかバジリスクは自分の手では決して人を殺さない。彼と対峙して死亡者が出るのはいつもそのもの自身か身内による同

士討ち。自業自得と呼ばれるものが多い。
数少ない生き残った者の中でかなり限られた理性を持つ人間が残した言葉が。

『あの目は悪魔の瞳だ』

そう言うとその人間はその時のことを思い出したのか発狂した。
そして、いまだに精神は壊れたままだ。
だからこそヤコマは恐れていた。
十時間後といったサカサの言葉に。

対して、オノト王子はそんなことはつゆ知らず。
先ほどまで傭兵たちに文句ばかりを垂れていたがサカサの言葉を偶然拾い上げた管制官の頭を叩きながら、まるで講演するかのよう
に唾を飛ばしながら喋る。

「今から九十分後。奴らが第十六補給陣営について休んでいるところ
に長距離のミサイルランチャーを叩きこむそれでも足りないのなら残っている戦車を持ち込めばいいことじゃないか。いくらバジ
リスクと言われている奴でも大火力の間ではただのトカゲだ」

「いや、あやつは」

「うるせえな！親父！それでだめでも俺らにはこれがあるだろ！」

オノトは自分の懐から青い石。ジュエルシードを取り出しながら、
自分の父親の王冠に付いた石を指さす。

「俺が増殖の王。親父が再生の王だろ。それにあの花の薬中兵士
もいるんだ！俺らの勝ちなんだよ！」

そう言うオノトだが、サカサがあちこちで施設を破壊していると
いう情報を聞いたときには怯えた豚のように震えていた。しかし、
状況が自分に向くとなると強気になる小物。いや、愚か者だった。

思い出してほしい。

エル姫がいなくなった時、サカサは何を王に指示した？

そして、サカサは何をしただろうか？

そして、新王国最後の月が沈む。

バジリスクの毒は静かに回り始めていた。

サカサ「えーと、エルの容姿は原作リリカルなのは中学生時代のフェイトの髪が黒くてツインテール。肌は健康的な小麦色。胸は、残念オリジナルよりツーカップほど下とのこと」

リニス「それでも十分ですよ。…私なんて」

サカサ「あー」

エル「えー、と。リニスもそれなりにあると思うよ?。」

リニス「良いんです。どうせ私はツインじゃありませんから巨乳になれませんし」

たかB「巨乳の条件はツインテール?」

エル「そうなの?!」

サカサ「いや、遺伝と環境と日々の努力」

エル・リニス「夢がない!」

サカサ・たかB「代わりにグロがある」

エル・リニス「いやっ」

ドンピキの二人。と、いうわけで（どういうわけかはきかないで）
次回予告。

次回 サカサの切り札！テイクオフ！

サカサ「もう、このタイトルを出す?」!

第四話 サカサの切り札！（前書き）

力を与えてはいけない人に力を与えたらこうなる。

：主にサカサの手によって。

追い詰められていく敵の姿とそのあわつてぷりにやりと顔をゆがめるサカサの顔が見えた。

邪道でどSなダークヒーローって、こんな感じなのかな？
次回あたりで一応完結。

第四話 サカサの切り札！

サカサが得るとリニスを回収して九十分後。

地下シエルターに設置された映写機に映し出されたのは元王女だった少女の風貌をした影と異国から来た長髪の男の影だった。

映し出された現場は、一人の撃退の為に急遽作られた二十はある補給基地の一つ、第十六補給陣営。その真ん中に位置するテントの窓から見える茶髪の髪と黒の髪。そして、一匹の猫の姿があった。

『…目標を確認』『こちら、A班異常無し』『B班、包囲完了』『残り、全部隊集結しました』『決して、この包囲は破られません』

「…よし、それじゃあ、まずは威嚇射撃だ」

「オノト！？何を言っておる！早く殺さぬか！」

「あわてんなよ親父。よく考えても見ろ。残り戦力のほとんど計三百人以上の傭兵が囲んでいるんだぜ。しかも、重戦車も四機配置している。これでここをすり抜けられる奴なんていやしねえよ。さらにエルというお荷物姫もいる。…親父は見たくないか、散々俺たちを舐めていた屑が悔しさにまみれる顔を、絶望に打ちひしかれる顔を」

「…オノト」

現国王ヤコマは自分の息子の凶行に引いていた。

確かに文字通り猫一匹逃げ出せない布陣であるが、それは同時にこちらの守りがかなり手薄になるということ。

「あの髪と形は…。エルか？もったいないが死んでもらうぜ、猫とトカゲと一緒によ」

バジリスクを相手に、千人以上いた傭兵。家臣達の半数以上がやられている。

バジリスクがこんな愚行を犯すものだろうか？

「さあて、威嚇射撃を開始！」

いくら二日間、一つの国を相手にここまで大打撃を与えた人間が、自分がどこに行くかと発するものだろうか？気づかなかっただろうか。

開発途中の島に建てられた建設中のビルからの狙撃者に見つかる前に彼らの眼球に銃弾を浴びさせ、戦車砲が発射される前に砲身の中に散弾銃を発射し、戦車を爆砕した。ロケットランチャーを使用して広域範囲の攻撃を行っても着弾したり、爆発する前にそのすべてをハンドガン一つで打ち落とした。

『威嚇射撃を行います。…！王子！奴らが出てきました！手には我々から奪ったハンドガンかと思われます！』

「まずは両手。次に足。その後に奴らの周りを砲撃。まだ殺すなよ。あいつらの泣く顔が見たいからな！」

そんなバジリスクがこんな簡単な愚を犯すとは到底思えない。と、なるとこれは揺動ではないだろうか？

答えはNOだ。

『イエッサー、くそにも劣る二ト王子。姿形、嗜好に行動。その殆どが俺とは合わないとは思っていたけど。その考え方は同じだな！』

通信回線から響いたのは憎き怨敵であり、恐怖の対象のバジリスクだった。

「なつ、貴様！誰に向かってそのような言葉を発している！」

『H A H A H A H A H A。てめえこそ俺を誰だと思っている？天下無敵の天才様がてめえの為に顔を崩してやるわけないだろ。ヒーハー！』ちよ、ちよっとお兄ちゃん！』『こんな荒れ地をバイクで二人乗りしながら片手に無線。胸元に猫^{わたし}。：無茶苦茶です』とりあえず、忠告するぜ。この通信を聞いているお馬鹿さんたちにスペシャルなお知らせだ。二時間後。この島にある宮殿を中心に焼け野原になる半径二キロ圏内にいる奴らはすぐに逃げ出したほうが身のためだぜ！』え！？き、聞いてないよ！』当然だ。今言ったからな！』

「ぞ、戯言を…」

『嘘だという二ト王子さんの意見にむかついたので見せしめに：目標ポイント2381875305・3552891089。人^サ工衛星光線照射。HEY！第十六補給陣営にお集まりの皆さん。そこからすぐに逃げないと死んじゃうZE。追伸、今そこから出たのは俺が特殊メイクさせたお前ら傭兵の仲間』

オノト王子は通信機に向かっていら立ちを隠さずにいたが、逆にヤコマ王は青ざめていた。やはり、バジリスクは我々なんかよりも上だということを今まさに思い知らされたということに。

「バ、バジリスクよ。降参だ！だ、だから。命だけは助けてくれ！」

「はあ！何言っただ親父！これから巻き返せば」

「黙れ！バカ息子が！奴を仕留め損ねた今、我らに勝ち目はない！」

ヤコマ王が負けを認め登校しようと切り出した。が、それに対してオノトは意義を建てようとしたが一喝された。

「ほう、その声は臆病王のヤコマじゃねえか。どうした？今更、命乞いか？」

「そ、そうだ、これからそちらに投降する。だから……」

『勘違いするなヤコマ。お前を殺すかどうかを決めるのは俺じゃない。この島にいた住民だ。…もう、百人足らずとなったが、そいつらに命乞いすんだな！』

ふざけていたサカサの声に初めて怒りの色を混じり始めた。サカサは別に誰がどうなろうと構わない。ただし、自分が気に入った人間が関係してくると話は別になる。自分が気に入った人間を傷つけられた時、サカサの中でその人は 気に入らない 人間になる。

例えば、目の前に死にかけた人がいても、その人が見ず知らずの人間ならよくて、あくびをしながら救急車を呼ぶ程度。気に入っている人間ならその場で応急処置を行う。むしろ、その場で治す。それぐらいのことなら造作もないことだった。

だが、気に入らない人間の場合。応急処置ではなく、悪化処置。むしろ、さらに追い込む。

例えば、応急処置に見せかけて、神経を傷つけ半身不随にしたり、いつまでも引かない痛覚を引き起こしたり等。救急車に運ばれて処置を受けた時よりも悪化するような作業を平気でやってのける。

もちろん、これは犯罪だ。しかし、誰もサカサを責めることは出来ない。

何故なら彼は天才だから。

医者、弁護士、監察官のトップクラスがサカサに証拠として突きつけてもそれをひっくり返すほどの技術を持っているから。

むしろ、サカサを敵に回そうなどと、考えることが馬鹿らしい。裏の世界。バジリスクを知っている人間の共通観念でもあった。

「な、なな。何を言っているのだ！それでは私に死ねと言っているようなものではないか！私はただ、国のため」

ガッオオオオオオオン！

突然の発砲音がシエルター内に鳴り響いた。

「…は、はは。親父が悪いんだぜ。俺のことを馬鹿なんて言うからよ。ここまで来たら最後までやるしかねえんだよ。いや、これこそが正しい。この国は、この国の王は俺様だ。オノト王がこの国にふさわしいんだ！」

「…お、オノト」

「あばよ。臆病王ヤコマ」

そして、もう一度銃声が鳴り響く。

『…屑だな。まさか、自分の親にまで。自分の面倒を見てくれた人間にまで銃を発砲するとはな。しかも今の今まで世話になっていた親を撃つ。思い上がった最低の屑だ』

サカサの言葉に続いて慌てた様子でエル姫が無線を使う。

『…お、叔父様！返事を、返事をしてください叔父様！』

「はっ、俺が屑ならてめえはゴミだろ！エル、今なら俺の妾に迎えてやる。俺の所に来い！」

『ふざけないで！あなたは、あなたという人は自分の父親にすらも手をかけて…。そんなに王になりたいんですか！』

『…おい、エル。無線を寄せ。ヤコマ。生きているなら返事をしろ』

エルの怒りに対して、サカサの怒りは冷め切っていた。逆に違う感情が芽生えてくる。

「聞こえなかったのか？ゴミの耳じゃ？二回目の発砲音で親父の頭を撃ちぬいたんだよ。無能な王様をよお！」

『…オノト。一度だけ言っ』

「ああ、王に向かって何をほざきやが」

サカサはまるで日常会話のように、それでいてどこか楽しそうな声でオノトに己の気持ちを伝えた。

『俺はお前を永遠に殺す』

ザアアアアアア。

ここで一度、通信が途切れた。と、同時に。

ブツン。

「だ、だい、第十六補給陣営からの映像途切れました！」

「ああ、何をしてやがる早く映像を出せ！てめえも撃たれたいのか！」

ガオンッ。

自分ひとりじゃここの機材は口々に扱えないくせにシエルターにいる自分以外の人間の頭にまで銃を発砲する。

「ひ、ひいつ」

自分の隣で同じように働いていた同僚が頭を吹き飛ばされるのを見て恐怖に駆られる通信兵。このままでは自分も同じように殺されると

「え、映像来ます」

再び映し出された映像。それはあまりにも変わり果てた陣営の姿があつた。というよりも何もなかつた。ある物を除いて。

第十六補給陣営。そこには少ばかりのテントと木の杭と有刺鉄線で囲われた急造の補給地点であつたが、それでも銃器や弾丸の火薬庫。更にはバイクや四輪駆動車などの移動車両もあつた。が、その全てが無い。代わりに・・・。

煌々と赤く熱された巨大なクレーターがあつた。

「な、なんだ。この巨大な穴は……」

ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオ。

オノト王子がそう言葉を発そうとした時、大地が、いや、地中にいる筈なのに空が鳴り響いたことにシエルター内の人間全てが感じ取った。

「な、なんだ、何が起こっている！？誰でもいい報告をしろ！？」

「で、電波。いえ、違う。地中に張り巡らされた有線の通信機すらも切断されています！発信受信ともに不能！」

「くそがつ」

ガオンツ。

オペレーターは逐一報告を怠らず任務を全うしていたが、半ば正気を失っているオノトには関係なかった。ただ、今の状況に苛立ち、

その苛立ちを目の前の人間に八つ当たる。という形で銃を発砲。これでシエルター内のオペレータはいなくなった。いるのは自分を守る親衛隊のみ。

[illegible]

だが、その親衛隊も銃などの重火器はもちろんナイフ一本も持っていないガードマンのような存在。彼らも目の前の凶行を目にしてパニック前にまで追い詰められていた。

それでも、空は未だに鳴り響いていた。

「おいっ、そこのお前！」

「は、はっ！」

「今すぐ、このシエルターを出て外の様子を見てこい。今すぐだ！」

「い、いえ、しかし、この地響きの中でシェルターを出るのは」

ガオン。

また一人、オノトの手によって殺される。

皮肉なことにその銃声と共に空が鳴り響くのを止めた。

「おい、今度はお前だお前が行け！」

「は、は、はあ！」

今、外に出たら死ぬかもしれない。しかし、逆らったら死。

彼らに残された道はオノトの命令に従うしかなかった。

ちなみに彼らがいる地下シェルターの広さは5LDKの三階構造になっており、彼らがいるのは二階の居住スペースの部分。三階には非常食の備蓄庫などが設置されている。上下の階へ移動するにはしごを使わなければならない。更に地下一階部分から地上に上がるには王族専用のエレベータを使って200メートルを一気に駆け上る。もしくは別口に設置されたはしごで200メートル自分の力のみで這い上がらなければならない。

だが、彼はそんなことをする必要がなかった。何故なら一階部分に出た時点で太陽が昇り始めた青空を目にしたから。

「なっ?!ち、ちじよ、熱?!熱いイイい!!」

何故、地上に出られた?という疑問を口にするよりも、自分が出た空間の異常な熱波により体中を焼かれていくような状況にのた打ち回りながら自分が出てきたシェルターに逃げ込む。

「おいつ、外では何が、あ、熱い?!なんだこの風は…」

「も、申し上げます。外に。地上が」

「あつ、何を言つて」

オノトがいきなり落ちてきた男に質問を続けようとしたその時、開けっ放しになったシェルターの入り口の方から声が鳴り響いた。

『あーあー、テストス。こちらサカサ。いや、バジリスクの方がいいか?こちらバジリスク。お前らの上にあつた宮殿はもちろんシエルターまでの地面。薬漬けの兵士。その他諸々。全て、俺の組織

で打ち上げた人工衛星ピナカによる衛生軌道上からによる熱光線で
焼き払った』

「「「「「！！？」「」「」」」」」

シエルターの中にいた人間全員が息をのんだ。嘘だと思いたかつ
た。だが、

先ほど映し出された映像を思い出す。あれは確かに……。高熱の何
かが地面を決っていた。

『ニート王子の傍にいる奴らに伝える。…あと二分もしないうち
に第三射、四射と続けて撃つぞ。ニート共にそこで焼かれるか。そ
れともこの島の北に停泊している俺の潜水戦艦リヴァイアサンにか
くまっている現地住民に裁きを受けるか。好きな方を選ぶべ』

現在。このシエルターの中にいるのはオノト自身を含めても十人
未満。しかも、その卑屈な性格の所為か銃を持っているのはオノト
とその父親のみだった。

このバカナ王を見捨てて逃げ出せば後ろから撃たれる。しかし、
ここにはこのバカナ王に殺される。そして、バジリスクによつ
て殺される。となれば。

「うわあああああああ！」「どけ、どけよおおおお！」「
俺が、俺が先だああああ」「嫌だ、死にたくないiiiiiiiiii
！」

たとえば、熱射に浴びようがこの先、ここの原住民に裁きを受けよ
うが少しでも生き延びる可能性があるのならそれにすぎる。生への
本能が彼らを穴倉から地上へと突き動かす。

「お、おい。貴様ら、俺から離れるな！」

「うるせえ！ニートオオオオ！てめえはいつも人を見下しやがって、たまには自分のことは自分で果たしやがれ！」「そうだ、もとはと言えばてめえがこんなことをしなければ！」

「き、貴様等、王に向かつてなんという口を…」

「誰もてめえの事なんか王なんて認めねえんだよ！このニート！」
「そうだ、この豚が！人の愚痴しか言わない豚は死ね！」

逃げ出そうとする人。オノトに殺されるかもしれないのに刃向う人。これが彼らの生死を分けた。その数はともに四人。

「き、貴様等ああああ！」

ガオンッ。

「ウオオオオオオオオオオ！」

「くたばれええええええ！」

再び銃が打たれるが、この銃声で誰かが死ぬことはなかった。恐怖から怒りに反抗派の四人は自分の腕を盾にしてオノトに突進。銃を彼から引きはがすとその丸い体と顔を殴り続けた。

「がつ、ごぶつ、げつ」

口から血を噴出しながらオノト王子は滅多打ちに合う。運動不足の体では彼らのマウントポジションを外すことなどできない。一人は腕を盾にしたせいで震えなくなつた拳の代わりにオノトの顔

をけり続ける。残りの二人は身動きできないように足の関節や腕の関節を折る。

「くそが！よくもマスティンを、オレゴノを！」「ジョシアンを！」「豚あああ！てめえは最初から最後まで気に入らねえええええ！」「二ート！てめえは下らねえ屑だあああ！」

身動きが取れないなかでオノトは思った。

自分を馬鹿にする奴らをぶち殺すだけの体が欲しいと。

どんな痛みも感じることはない体が欲しいと。

こんな醜い体ではなく巨大な樹木のように偉大な風格を持った体が欲しいと。

殴られすぎて薄れゆく意識の中で願ったそのあまりにも身勝手な願い。

それは叶えられた。二つの青い石、ジュエルシードによって。

サカサ視点。

元宮殿跡地、というよりも巨大なクレーターから二百メートルほど離れた所に二人の人影がある。言わずと知れたサカサと元王女エルの二人である。

「おーおー、出てきた、出てきた。まるで何年も手を付けていない排水溝に殺虫剤をぶち込んでGやMがうじゃうじゃと出てきているようだ。害虫パニックならぬ外人パニックといったところか」

二人はサカサがどこからともなく取り出したオペラグラスで、地下シェルターから逃げ出したガードマンたちの姿を見ていた。

「お、お兄ちゃん。人をそれ扱いするのはちょっと…」

サカサの発言に顔を引きつかせるエル。彼女はオノトの命を奪うまで帰らないと言い出してサカサから離れようとしなかったのでサカサが連れてきた。

「しかし、携帯電話ひとつで人工衛星を動かしてしまうとは…」

エルの肩で呆れたような顔でサカサの横顔を見るリニス。彼女はエルに同行すると言ってついてきた猫は先程サカサの胸から這いずり出るとエルの肩に乗ってサカサの言動を見張っていた。携帯電話をいじり始めたサカサを見て一分もしないうちに空を震わせ大地を抉り取った白の極太レーザーに度肝を抜かれた。

「一応、ピナカにはスタッフも乗せてるぞ。あとで特別ボーナスでも出すか」

人工衛星ピナカ。破壊神シヴアの愛槍の名であり、天界、空、地上の街を一撃で滅ぼしたという伝承に預かり名づけた、サカサの最大傑作（切り札）。その武装は一つのみ。見ての通り極太レーザーによる目標の焼失。ちなみに賃金は年に三か月の勤務で報酬は約三億円。その殆どは何もせず自分がしたいようにしてもいいと言うのがサカサスタイル。ただし、必要時には何よりも最優先されるのもまたサカサスタイルなのだ。しかし、どこかの勢力に取り込まれそうになったら自爆するようにできている為、ある意味人生最後の職場と称されてもいる。

「さすがに二発が限界か…。まあ、嘘でも効果は抜群だな」

「う、嘘だったの！」

第三射、四射の警告が嘘だとは思わなかったエルはサカサの方に顔を向ける。

「当たり前だ。普通の衛星で一回でも撃つたら自己融解はまぬがれない。しかし、さすが俺の切り札。送られたデータだと修理をすればまた撃てる。改良の余地あり。と、エル。一応秘密な。言いそうになったら予め俺にちゃんと相談しろよ、じゃないと今度はお前自体が的になるぞ」

「う、うん！絶対、絶対に言わないよ！」

顔を青ざめながらもエルは高速で頷いた、過去に似たような事例をアリサ・バニングスも体験しているがそれはまた別の話。

「でも、これで…ん？」

「これは…。魔力反応！？」

サカサの目に飛び込んできたものは丸くぶくぶくと太ったオノト王子の姿。だが、その体にまとっていた物が異様だった。

赤い花が所々に咲いた樹木の服。人面樹ならぬ人体樹。まるで木が人の形をかたどっているかのような風貌でオノト王子がシエルターから這いずり出てきた。

「ふは、ふはははははは。やはり俺が、俺が王なんだあああああ

「あああああああ！」

這いずり出たオノトが雄叫びを上げると同時に彼の体に張り付いた樹木の服がはじけ飛ぶかのように周囲に広がる。そして、広がったところから栄養分を吸い上げているかのように脈動すると、オノトの体が一回り大きくなった。

このままではさらに大きくなってしまふ。と、リニスが思った瞬間にはサカサはまだ灼熱のクレーターに飛び込んでいた。

「これはいかな。おいつ、起きろミネルヴァ。仕事だ。お前の切り札を使う」

サカサは懷から琥珀色の水晶玉を取り出すと軽くこんこんと小突いた。

「ヤットデスカ。トットト、ヤツヲ、ツブイシ、クダイテ、バラ
バラ、ニ……。テエ、アレデスカ?!」

水晶玉から聞こえてきた声は本気で慌てていた。

「もちろんだよミネルヴァ君。ピナ力が使えない上にエルたちがいるんじやあ艦砲射撃も使えない。手持ちの銃や榴弾だけじゃ足りないし、俺たちだけであいつを潰すしかない。赤犬、青蛇はもう意味をなさない状況だからなあ」

「ふはふはふはふはふはふはふはふはふはふは！」

サカサは零れ落ちる汗を気にせず、今や植物の化け物と化したオ
ノトの前に立つ。

「アー、ホントウダ。コレハ、イイグアイニ、コワレテマスネ。
シカタナイ。ヤット、デバンナノニ、サカサ、食事^{シヨクジ}ノ、トキハ、ヨ
ンデ、クダサイネ…。リヴァイアサン。コード、アクセス！シヨヨ
ウ、ジカン、480000ビヨウ」

そんな化け物を前にしてミネルヴァもため息交じりにサカサの言
っていることを理解した。…もう、目の前にいるのは人でもなく、
化け物でもない。サカサの玩具であることを。

ジャリイ！

白い手甲^{バリアジャケット}がサカサの手を覆う。そして、その手の甲に着いた三色
のビー玉のうち、黒いビー玉が手甲の白に染まるとサカサの目の前
には直径一メートルの黒い球体が浮かび上がっていた。

「王の俺の前にひれ伏せ、バジリスクウウウウウウウ！」

オノトの雄叫びもサカサには笑いをこみ上げる為の材料の一つで
しかなかった。

サカサは白衣から二丁のハンドマシンガンを両手に取り、オノト
にその銃口を向けた。

「クハハハハハハ。見せてやろうぜ、ミネルヴァ。俺たちの切
り札を！」

「ガッテン」

サカサはその時、最高の遊び相手を見つけたかのような無邪気な
顔をして笑いながら引き金を引いた。

「クロフネ
「黒船」!!」

第四話 サカサの切り札！（後書き）

あとがき

サカサ「いやー、いい感じに壊れてきたな敵さんも」

エル「ぷるぷるぷる」

リス「…大丈夫ですか？エル？寒いのですか？」

エル「あのキモ王子に求婚され…ウエ」

ミネルヴァ「…ヒトハ、ミカケニヨラナイ。コノ、ワード。

シンジラレナクナル、ヨウナ、オハナシ、ダッタシネ」

サカサ「しかし、この小説は進むのが遅いな。本編ではもう、俺はツルギに合流しているようなのに…」

たかB「…すみません」

ミネルヴァ「ゴウリユウ、シテモ、タイヘン」

エル「本編？」

たかB「キニシナイデ」

オノト「俺を木にしないで」

エル「ぎゃあああああ、お、オノトオオオオオ」

オノト「ぶふ、せつかくここに来たんだから好き勝手にやらせてもらうで。エールー」

エル「いやああああああ！お兄ちゃん、携帯かして、ミネルヴァ貸して！」

にじり寄ってくるオノトにエルは思いっきり身を引きながらサカサからミネルヴァと携帯電話を奪取。

エル「ミネルヴァの 黒船 を起動！ピナカに繋いで！人工衛星^{サテライトレ}光線照射^{レーザーシート}オオオオオオオオオオ！！」

オノト「ぎゃああああああああああ」

ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

サカサが作り出したなんちゃってスターライトブレイカーがオノトの体を影も形もなく焼き尽くしました。

サカサ「あー。…次回予告」（呆れている）

リニス「えーと、黄金の瞳のバジリスク」

ミネルヴァ「ナンカ、サイシユウカイ、ポイ」

エル「うえ、うえ、うえ」

サカサ「…なんか締まらねえな」

たかB「オノト…。気持ち悪く書きすぎたかな」

エル「うわあああああん、名前だつて聞きたくないよおおお
おお！」

第五話 黄金の瞳のバジリスク（前書き）

魔法が少ない！

でも仕方ない！

だってサカサは科学者ですもの！

デバイスに使い魔までいるんだからそんなにバンバン使えるはずがない！

…はい、ただのいいわけです。

めちやくちや長いお話になりましたがどうぞ読んでください。

第五話 黄金の瞳のバジリスク

人工衛星ピナカから光線発射数分前。

サカサは荒れ地となつた宮殿周辺の荒野から宮殿の中をオペラグラスで覗いていた。

宮殿の周りには明らかに人の領域を過ぎた筋骨隆々の兵士が甲冑を身にまとい闊歩していた。

「…あれはもう駄目だな。麻薬で痛覚だけじゃない人格。意識すらも失っている。いわば人の体を持ったロボットだ」

「それは…死んでいるということなの？」

サカサの言葉を聞いてエルは悲しそうに質問をした。

「いや、心臓も動いているし、息もしている。瞳孔も目に入る光に合わせて変化している。肉体的には生きている。けどな、もうロボットのように入の命令を聞くことしかできない状態だ。…エル、お前はそれでもあいつらが生きていると思うか？」

「……………」

「治療をしようと思つてもあれだけ強化した。いや、された奴らを十人まともに相手にするには今の装備じゃ、無理だな」

（まあ、黒船を使えば、その点は解消されるが…。リオストーンの問題がある。あれは未だにどんなものか、この眼で見てもわからないからな）

サカサは懷にある水晶玉に触れながらエルに事実を述べていく。

「…治療できるんですか？それなら」

「脳みそをいじくりまわして、最高でも植物状態、最悪なら死が待っている。という状態になることを治療というのならな」

「…彼らを助けきれないんですね」

エルは手当てしてもらった右の耳に少しだけ触れながらサカサの言葉を受け止める。

「もともとオノトに服した奴らだ。構うことはないよ。エル。それに俺がいなかったと考えてみる。お前はあいつらを助けながらオノトを討つことが出来るか？」

「……………出来ません。きっと彼らを殺してでもオノトを討ちます」

サカサというバックボーンは心理的にも戦局的にも心強い。相手の心理の裏をかき、その上、重火器や近代兵器の扱いに精通している。一人で一つの国を相手にしても鼻歌交じりに撃破できる。それぐらいの余裕が出来る。

だからこそ、エルは救えるかもしれないといった。考えてみれば傲慢だったかもしれない。これではオノトやヤコマと同じ力におぼれた人間になるということに。

「…結局、私も彼らと同じなんですね」

「エル！？そんなことは…」

エルの言葉に黒猫のリニスがそれを正そうとしたがその時、サカ

サの持っていた携帯電話（違法改造）がオノト達の通信を傍受した。

ぶっ、ザーザー。

『…班異常無し』『B班、包囲完了』『残り、全部隊集…』

「しっ、二人とも通信が入る。とつととバイクに乗り込め。あいっから見事に罠にかかった。…エル、あの兵士たちを宮殿ごと焼き払うが構わないな？」

「あなたは！」

サカサの言葉に激高したりニスは飛び掛かるうとしたがエルにそれを止められる。

「お願いします。ただ、お願いが一つあります。彼らの最後を見ておきたいんです。せめて、最後まではこの住民だった者たちの最後を見届けさせてください」

「…エル」

体は震えながらも、その体から発せられたエルの言葉にリニスは押し黙る。

サカサはそれを見て、エルに背を向ける。そして、自分のサングラスを取りエルに投げてよこす。

「今から文字通り、欠片一つ残さず焼き尽くす。後悔しないように。だからそれを見るといふのならそれをつけている。出ないと視力を失うぜ。…ほら、とつとと乗れ。少しここから離れるぞ」

サカサはこの荒野に配備されていたバイクに一人と一匹を乗せる

気が付けば奴の口の中めがけてハンドマシンガン（自分特製）の一発を打ち込んでいた。

「き、ぎざま、びどがじゃべえええ！」

ガガガガガガンツ。

あまりにも耳障りな声だ。

同じ王族だったエルやその親父とほんとに血筋なのかと思うと声も聴きたくない。

気が付けば奴の口の部分にあたる部分をハンドマシンガンで致命傷を避けて（・・・）吹き飛ばしていた。

「ぐ、…べ」

オノトはその場に倒れ伏した。

その大樹のように大きくなった巨体は俺の方に向かって倒れこんでくるのを軽くかわしながらも俺はオノトから銃口を外さなかった。何故なら…。奴の汚い目はまだ生きていたから。

「…死ねええええ！バジリスクウウウウウー！！」

ガコオツ！

地面から来たわずかな振動。その瞬間、足元から土色の槍が俺の顔をめがけて突き上がった。

「な?!」

「ひゃひゃひゃひゃ、串刺しにしてやるよおおおおお！」

これは…木の根？！

ガガガガガガガガガガ。

「こ、ん、のお！」

地面から幾本ものの木の根でできた槍が襲いかかってくる。

どうやら振動の中心から突き出てくる仕組みらしいんだが…数が多すぎる！

振動は徐々に大きくなる。震度の強さが増せばますほど地面から槍がいくつも地面から突き出てくる。と、その時、槍と一緒に何かが地面から飛び出してきた。

ブチャ。

それは肉の塊。

だが、その肉の塊には白いひげが生えていた。穴が複数もあった。

びちゃ、びちゃちゃちゃ。

突き出した木の槍と一緒に地下から幾数物の肉塊が打ち上げられ、落ちてくる。

それは五つの枝分かれた肉だった。それは蛇のように長い何かだった。それは内側にある何かを守るための肉だった。

それらはすべて人のパーツだった。

「オノトオオオオ！」

「ひゃひゃひゃひゃひゃ」

ガガガッガガガッガガッガガッガガッガガッ！

俺は引き金を全力で引く。

両手に持ったハンドマガジンをオノト本体だろうと思われる樹木に全弾叩き込む勢いで銃弾を撃ち込む。打ち込んでいる間も木の檜は地面の下から襲いかかってきたが足元から感じる振動を避けるように移動すれば木の檜は避けられる。

そして、未だに倒れているオノトは笑いながらその銃弾を受けて銃弾の雨で粉々になっていく。そして、完全にその姿を吹き飛ばす。

ガオンッ。

「ぜえ、ぜえ。…これがオーバーパーツの力…なのか？」

最後の弾丸を撃ち尽くすと俺は両手に持ったハンドマガジンを地面に捨てて。銃弾を受けている中、オノトの体が粉微塵になっっていくにつれて木の檜もその勢いを無くし、今は静かになっていた。

「…ミネルヴァの 黒船 を使う必要もなかったな」

肩で息をしながら辺りを見渡す。そこには串刺しになり、バラバラになった肉塊。その中に見知った人間の顔があった。

「…ヤコマ。お前は息子を甘やかしすぎたからこんな目に…」

ヤコマ王の首に近づきながら、その首についていた王冠に手を伸

サカサが王冠を手にするとそこにはめられていたはずの青い石がなかった。

ドオンッ。

火山噴火？いや、これは…。

「まじか？」

先ほど粉微塵に吹き飛ばしたオノトの姿。しかも……

気持ち悪い植物。まるでゾンビのようにクレータ中からあとからあとからと湧き出てくる。それがクレータの中を、俺を取り囲むようにぞわぞわと生えてきた。

「……しかも、その花。最悪だな。お前、あの麻薬の花をつける木と融合したのか？」

「そうだよバジリスク。この花のお「かげで」痛みは感じない。その「上、俺は養分があれ」ばどこま「で」も増えるこ「とが出来

る。王の石「を持つ俺様」の力でなあ。親父の持ってい「た石も取り込んだ。無限「に再生、増殖できる」王の力だあああああ！」

ああああ、気持ち悪い声があちこちでハウリングして気持ち悪い。オノトは気持ち悪い顔を俺に向けてまだ演説を続ける。

あの花は粉末にして焼き魚や焼き肉に少しだけ振り掛けると言い塩の代わりになるやつなのに過剰に摂取すると感覚がマヒして最後には脳神経をやられる。

ヤコマがこれで国政を潤そうとしたこの花は麻薬に近い。その花の木とどうやって融合したかはいまだにわからないが、恐らくオーパーツの所為だろう。

「ひゃひゃひゃ「ひゃ、どうだ、バジ」リスク。もう弾「切れだろう今から」お前をぐちゃぐ「ちゃにひき潰して」やるよおおおお！そして、ためえも俺の養分にしてやらアアアア！」

「舐めんな。バジリスクはそんな安くはないぜ」

「ばりりする。ばりるる。ろこす。ろろす」

「…オノト？」

「ロロス！バリリルス！」

くそつたれ！本格的に精神が壊れたか！

ドオンッ。

複数の人体樹から木の枝にあたる部分が急激に膨張。それは俺にその枝先を向けると真っ直ぐに伸びてきた。しかも…。

ぐちゃあ。ぐちゅちゅぐちゅ。

「食虫ならぬ食人植物か！エル！リニス！北に逃げろ！そこに俺の戦艦が来ているはずだ！そこにいったん逃げ込め！」

足元に転がっていたヤコマ王の生首を貫いたところから水分を吸い取り最後には吸い込まれるかのように消えていった。

「バ」「リリ」「ル」「ク！」

くそっ！俺は戦闘民族じゃねえぞ！…シカタナイ。マンガみたいに無数の枝の槍を高速で避けるなんて真似は出来ない。だから…。

「つまらなくなるが使わせてもらっ！」

サングラスを取った俺の目の前には、視界を埋め尽くすほどの木の槍が迫っていた。が、その枝は右に三歩、前に一歩。

ガッ。

次は左に二歩、後ろに一步。次は首だけを右に傾ける。前にダッシュ。次は静止。前に三歩、左に一步。半身にひねる。

がががががつ。

「るあ？ぶるあああああ？！」

ゆっくりと、この包囲網を歩き、ときには止まり。その包囲を抜

けていく。

「悪いがオノト。俺を仕留めたかったら点じゃなく面で攻めないと攻撃は当たらない」

千樹一葉。

裸眼で周囲にある人体樹を見ることが目の前にある物を完全把握する能力。

オノトの性格、この木の枝による攻撃の有効範囲。等の情報からどこに攻撃してくるかが予測できる。ただ、これを使うと知らないことまでわかるから使いたくはなかった。

例えば、この人体樹。どんな仕組みかわからないが神経のようなものが樹木全体に広がり、繋がっていて、その動力となるのが…死んだ人間を含んだ有機物。生きている人間だろうとそれは例外ではない。そして、現に生きている人間がその被害にあっている。

それはオノトを殴った従者たち。裸眼のサカサの目には熱源を感じするスコープのように地下の動きも見える。その光景は、木の枝で貫かれたものの刺し所が良かった。いや、悪いせいで体を内側から食われている状態だった。

「…マズイ。完璧に囲まれた。…元のオノトより賢くないか？」

そして、このスキルによって、サカサは逃げ道を塞がれたことに気づく。

もはや、クレーター内は小さなジャングルと化していた。そしてそのジャングルの木々たちが自分に向かって伸びてくる。いくら先読みをしようとその空間を塗りつぶさんといわんばかりに四方八方から木の槍が襲いかかってくる。

「…くそ」

ズガガガガガガガガッ。

ジャングルに木々がぶつかり合うことが響くと同時にボロボロの一枚の白衣が宙を舞った。

エル視点。

「…あ」

私は目に映った光景を信じたくなかった。

オペラグラスで遠くからお兄ちゃんの背中だけを見ていたら木の皮を纏ったオノトが出てきた。殺意よりも悪寒が走った。それでもその恐怖は偶成と共に吹き飛んだ。そのはずなのに…。

「おおおおおおおおおお」

お兄ちゃんを囲むように生えてきた人面樹が周りを囲み一つの林へ、森へ変貌した。そして白い背中を幾千ものの木の槍が襲った。いまは蚕の繭のようにその人体樹は丸まり中にいる希望を押しつぶそうとしていた。

「あ、あああ」

「エル、逃げますよ！北に向かって！彼の言葉が本当なら」

木の繭を囲うように次々に生えてきた人体樹はその繭にへばりつ

くと新たな外殻として何層にも重なりあっていく。

「いや、いやあ あああ」

「エル！」

がっ。

へたり込んでいた私の手のひらをリニスが力いっぱいに噛んでくれたことにより私は悲しみや絶望から少しだけ離れてリニスに気づくことが出来た。

「つ！」

「しっかりなさい！あの人の犠牲をあなたは無駄にするんですか」！

「あ、わ、私は……」

リンスが私をここから少しでも遠ざけようとした瞬間だった。

ゴ
バ
ア
ツ
。

ひつ

私の足元からオノトの顔をした木の根が地面から生えてきた。
その木の根は明らかに笑っていた。まるで悪戯が成功した子供の
ように。そして無邪気に…笑った。

「ぐひひや、ひや、ひやひやひやひやひやひやひやひやひやひや！」

「この！」

ザン。

リニスが不気味な木の根を裂こうとその前足からその体の半分はある爪を生やし不気味に笑う樹木を引き裂く。だけど、その不気味な声は途切れることはない。いつの間にか私の周りにも樹木が生い茂っていた。

「無駄無」駄「無」駄「無」駄「無」駄「無」駄無「駄」駄「無」駄
！！！！」

「うあああああああ」

「んああああ」

私とリニスは囲まれた樹木から伸びた枝に捕まり宙づりになった。そして、一段と太い樹木から赤い花が咲きだした。すると、その中にはオノトの顔が飾られていた。

「…う、あ」

「ひゃひゃひゃ、バジリスクも間抜けな奴だな。偽物の俺を相手にすべての弾丸を使い切りやがってよお。なにが面白くなる。だ。てめえの存在がつまらねえんだよ」

オノトの顔から眼玉や歯がボロボロと腐り落ちていき、その下から新たな顔が生えてきた。私はそれを見た瞬間に吐き気を催した。

「う、く」

「…化け物ね」

「はははははははははははは。再生と増殖。いくら破壊しても再生する。増殖を繰り返す。そして、今では取り込んだ奴の顔も体にもなれる。最強だろ、最高だろ、これこそが王だろ！」

ヤコマ叔父様。からいつか見た親衛隊の男性。逃ここを攻め込む前に私とリニスを何度も追い詰めた女性兵士。豊漁祭で司会を務めてくれた人。次から次へと新たな顔を生み出しながら

「…あなたは王なんかにはなれません。守るべき救うべき民を殺して自分の物にしてまで何が王ですか！この豚！」

「…なに？今なんと言った？」

「何度でも言っただけです。あなたは何かしないでゴロゴロと太る豚。…いえ、豚は人の役に立ちますから。これは失礼ですね。あなたは家畜にも家畜のえさにもならない役立たずの無能です！」

「エル！」

「…決めたぜ、エル。お前をどう殺すかを…」

リニスがこれ以上刺激しないように私に注意を呼びかけようとしたが、私は今まで言いたかったことをぶちまけた。すると、花の中の人物の顔が変わった。

その顔は私の最愛の家族で前国王。

「今から父（俺）はお前を犯し殺す」

「…お父様」

「…ジリル王。…オノト、貴様あつ！よりもよってエルの、父親の姿をお！」

「…黙れ！俺を馬鹿にする奴で男は皆殺しだ！女は無様に哀れにゴミのようにボロボロになるまで犯して殺す！この王の石がある限りなあ！」

お父様の口の中から青い光が見えた。

下の中に埋め込まれたかのような青い宝石が光を放ちながら私の方に伸びてくる。

「…増殖の石。俺が取り込んだものは俺が自由に扱える。そいつの顔を体を操ることが出来る。そして、これは宮殿の地下に置いていたお前の親父の彫像と俺の親父の肉で作った模造品だがいい出来だろ」

汚らわしい舌で私の頬をペチペチと叩きながら、その舌は服の中にまで張ってくる。

あまりの気持ち悪さに体をよじったが木の枝の拘束から離れることは出来ない。

体中を舐めとられる、そんな気持ち悪い拷問を続けたオノトの下は再び私の頬をなぞる。

「う、くうう」

「へひゃひゃひゃ、安心しろよエル。一発すんだら次はあのバジリスクで抱いてやるからよ」

うめき声をあげる私の口の中に宝石のついた舌が張り込んできた。こんな、こんな奴に……。何もできないなん……。違う！せめて一度だけでもこのクズの化け物に逆らう。

「むぐっうっうっうっ」

がふっ。

「ぎいいいいいい、エ、エフ、ヒサマ！」

私は口の中に入ってきた宝石を舌ごと食いちぎった。

そして、それは地面に吐き捨ててもう一度オノトの汚い顔に唾を吐く。

「あなたは屑です。王になれたとしてもそれは世界のだれもが屑の王というでしょう！」

「きいさまあああああ！」

オノトは咆哮と共に巨大な樹木の中からはい出る。そして、再び元の醜い姿を現せながら私の顔や腹部にその苦労も努力もしたことがない拳で殴りかかった。

「が、何度だって、い、います。ぐっ、あなたは、最低の、王。クズ王です！」

「ダメレエエエ、エル！もういい、ここで殺す！今殺す！」

「エル！」

オノトに殴られすぎたせい、私の意識はどんどん薄れる。ただ、心臓がどくどくと鳴り響くのが聞こえる。周りの音が聞こえない。リニス在必死にもがいて木の根から抜け出そうとしても逃られない。それでも逆らう。抗う。

「私は…あなたに何か屈しません！このクズお」

「死ねエええええ！」

オノトが再び木の根から槍を作り出すと私に向かってそれを突き出してきた。

直径は30センチぐらいだろうか。貫かれれば死ぬ。

それでも私は怒り狂ったオノトの汚い顔を睨みつけた。

そして、木の槍が私に触れた瞬間に。

ぐしゃ。

肉が潰れる音が鳴り響き、私の意識は黒に塗りつぶされた。

オノト視点？

馬鹿が。この馬鹿王女は、せっかく俺様の妾にしてやろうという最後の通告を無視して俺様に逆らった。

よりにもよってクズだと。俺は王だぞ。好き勝手にやっていいんだ。殺すも犯すも俺のなすがままだ。それが分かっていない。

そんな馬鹿王女。

もついらね。殺す！

王の石を一個取られはしても体の中には俺の体の中には再生の王

の石がある。

その石の力でもう一度木の槍を作り出し、それに命じた。木の槍は思い通りに動いた。そして、肉が潰れる音が響くと何故か目の光景が勢いよく回転した。

何が起きた？

ナゼ、エルに向かって伸びていた木の槍が砕けていて、俺の視界が左半分潰れている？

その疑問はある声で、すぐに解けたが理解できなかった。

「ぜえぜえ、頑張りすぎだ！エル。ぶはあ、俺は、ぐふう、そんなにスタミナはねえんだから、よ」

何で潰したはずのバジリスクがここにいる！？

「うえっ、きつたね。…使えない肉袋みたいになっているな。バイオハザード級の処理をしないといかんな、これは」

俺はすぐさま王の再生の石を使って体を復元させる。

ぐちゅぐちゅと肉が混ざり合う音が潰れた。痛覚はない。あの王の石を取り込む際にあの麻薬の花。ブリーシנגメルを取り込んだおかげで痛覚という邪魔なものは取っ払った。その上に不死身をおぼせるこの石の再生の力があればバジリスクだって…。

グオン。

そんなことを考えているとバジリスクの頭上に発生した黒い球体から握り拳大の何かが妙な音と共に零れ落ちてきた。

それは手榴弾だった。バジリスクはそののピンを抜くと俺にそれを頼り投げた。

「よつ。と」

ドオン。

「ぐがあっ」

俺はその爆発で右肩から先を吹き飛ばされるがすぐに再生が始まる。が、その様子にバジリスクは笑みを浮かべた。

猫のような金色の瞳を三日月状に歪めて。

グオン。

今度は細長い物が落ちてきた。それは機関銃。ここで雇った馬鹿（傭兵）達が使っていた。高速で銃弾を発射する鉄の筒。

「はははは、ゲームみたいに再生するのか？ちようどいい。試してみたい武器があるんだ。とりあえず鉄の雨を食らってくれ」

ガガガガガガガガガガ！

「ぐうああああああ！ど、どうして、どうやってあの木の檜から…」

その銃声に俺の声がかき消されているにもかかわらず、バジリスクは口の動きだけでそれを読み取った。

「見ればわかるだろ。この黒い球体。ミネルヴァの黒船は任意の場所から任意の物を引き出せる。今の所、俺の船からしか引き出せないが…」

グオン。

今度は今撃っている機関銃よりも細く短い物が沢山落ちてきた。
至近距離で放てば人間が一瞬でミンチになる散弾銃。ショットガン

「俺の船。リヴァイアサンには30000トン以上の火器と火薬
が積んでいるからあれぐらいの包囲はこれで吹き飛ばせるぜ」

バジリスクの後ろを見るとそこには無残に碎かれた木々の間に使
い捨てられた散弾銃が放置されていた。

まるでジャングルの中を巨大な猪がなぎ倒して言ったかのように
ジャングルと化したクレーター内の木々は吹き飛ばされていた。

ドゴン！ドゴン！ドゴン！ドゴン！

「ぐっ、がつ、げっ ああああ！」

「すげえすげえ。手足を吹き飛ばしたにもかかわらず質量保存の
法則すらも捻じ曲げて手足を伸ばす。どうなってんだお前の体は」

「舐めるなああああ！」

「へえ、再生をしながら俺に飛び移るか。だけど……」

グオン。

俺とバジリスクの前に黒い球体が作り出した影が横切る。そして、
また何かを二メートルほどの箱状な物を出現させると俺は飛び込む
形でぶつかる。

「がつ?!」

ぶつかった拍子に転がった箱はバジリスクの方に開いている部分を向ける。

「じゃあ、今度はその避難シেলターの耐久テストといこうか。テスト内容は…」

グオン。

ばらばらと雨のようにバジリスクの前に落とされた手榴弾の山。それらが地面に落ちる前にバジリスクはサッカーボールのようにポンポンと足で俺の入っている箱の中に入れていく。

「五十キロ以上の手榴弾が中ではじけたらどうなるかのテストといこうか」

「なっ!?!」

急いで脱出しようとした俺に向かって、落ちてきた最後の手榴弾のピンを外して放り込むバジリスク。

ボタン。

シেলターのふたが閉じられる瞬間に見た奴の顔。

その顔は子供のように無邪気で悪魔のように凄惨な笑顔だった。

ドゴンッ!

リニス視点。

バジリスクがオノト王子をシエルターから出すとそこからは銃弾と人の血肉が飛び交うだけの処刑場と化していた。

「おいおい、この程度で逃げ出そうとするなよ。まだまだこれからだろ。黒船え！無反動ハンドレールガンを引き出せ！」

グオン。

試作品の試し撃ち。一回使ったらすぐに捨てる。そして新たな爆弾や重火器を引き出す。

オノトはその実験動物へと成り下がっていた。

私たちに被害が出ないようになるのか。爆弾などで遠くに吹き飛ばされたオノトは爆弾で吹き飛ばことが無くなった。代わりに機関銃などの重火器の的になっていた。

「ひいつ」

ドゴドゴドゴ。バガンツ！

黒い球体から三脚のついた横幅が50センチ以上はある極太のハンドガンが現れる。

それを両手で構え三発発砲。バジリスクはそれをおもむろに投げ捨てる。それから数瞬のうちに黒船から出てきた銃は発砲後煙を上げて爆散した。

そして、打ち出された弾丸は空気を焼き、音の壁を砕きながら鉄の塊がオノト王子の体。いや、もはや的となった両腕を粉碎してい

$\angle$

「とっておきだ。ツインガトリングランチー！」

ズンツ。ズンツ。

黒の球体。黒船はバジリスクの頭上に移動するとバジリスクの体を覆うように二基の砲台を産み落とす。二基の砲台には巨大なガトリング砲が備え付けられておりサカサの手の位置にはその引き金が備え付けられていた。

「こいつも使い捨てだ。だから、惨たらしく愉快に踊れ」

青い空と海をバックにした金の瞳と口は、ピエロのように三日月を寝かしたかのような形で笑っていた。

ヴア アアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアア

アア!!!!!!!!

二つの砲門から弾丸の雨が放たれる。

羽虫の羽音のように耳障りで、悪魔のような雄叫びにも似ており、今まで鬺り殺してきた者たちの断末魔にも似ていた。

「いぎやああああああああ！！！」

植物に同化しているその体は痛みを感じない。しかし、その痛みを感じない体が鉄の雨で削られていく。焼かれていく。粉微塵へと姿を変えていく。再生も吸収も追いつかない。

「まだだ、残さずいただけえつ！」

バジリスクは笑う。

全ては彼の予定通り。

すでにエルの食いちぎったジュエルシードは最初にオノトを閉じ込めたシエルターの中に放りこまれている。そのせいか、周りの樹木はただの樹木となり果て、その持ち主を守ろうとも援護しようともしなくなっていた。

あのシエルターは頑丈で中にいたオノト王子がぐちゃぐちゃになりはしたものの外観を変えることなく私の横に鎮座していた。それはさておき。

相手を追い詰めながらわざと奥の手を使わせて、調子付させた後、その自信と余裕を粉碎し、相手の氣力を根こそぎ奪う。そして、徹底的精神的にも肉体的にもいたぶりつくす。

「くは、くは、はははははははははははははははは」

もう既にジュエルシードを取り出せるレベルまで痛めつけていた。しかし、それをわざと見逃す。オノト王子の中にあるジュエルシードがある程度、怪物と化したオノト王子の体を補修するのを待っているのだ。

「き、貴様あ。こ、こんなことをして許されると」

「なんでてめえの許しが必要なんだ？」

ズンツ、ズンツ。

黒船にもう一度手をかざす。するとどうだろう。先程鉄の豪雨を吐き出したガトリング砲がまた出てきた。

「な、
なんで・
・
・」

「なあに不思議がつてんだ」

「使い捨てだといったはずだ?！」

「お前は本当に馬鹿だな。確かに使い捨てだと言ったが……」

怯えているオノト王子。

対してバジリスクの顔は喜びに満ちていた。

「一基だけとは限らないだろう？」

$$\begin{array}{c} \neg \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cup \\ \neg \end{array}$$

「さあ、人の痛みを知らないやつに鉄のシャワーを浴びせましょ
う」

再び引き金は引かれる。

「ひ・・・あ、やめ、やめて」

ヴァアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアア。

銃弾の雨がまた吐き出される。血肉が煙となつてはじけ飛ぶ。

「くはは、くは、くははははははははははははははははははは」

バジリスクは笑い、クズの王ははじけ飛ぶ。

「ぶえばああああああああああああああああああ！！」

無限に回復する力を持つてしまったがために、無限に殺される。

「踊れ踊れ、無様に惨たらしくきたねえ面を弾けさせろ。てめえの顔が初めて輝く瞬間だぜ」

私は背筋が凍りつくような感覚になった。

「やめ、もう、回復。再生。するな。やめろ。こ、こんな力いらない」

あの黄金の瞳を持つ怪物に。
そして、哀れにも思えた。

「ようよう、再生のスピードを緩めんなよ。もっと遊ぼうぜ。おらおらおら、てめえの力を俺の為に使って散らせろよ。楽しませろよ、そのきたねえ面を見せろおおお！」

あの怪物の狂気の贅となったクズが。

「いやだ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ」

オノト王子の意思に反して体の中にあるジュエルシードは再生を促し続ける。しかし、サカサがそれを上回るスピードで体を破壊。ジュエルシードが飛び出る手前で攻撃を止め、回復を待ち、また痛めつける。

オノト王子が望んだ力はサカサにとって最高のおもちゃに過ぎな

い。特定の場所を撃ちぬかない限りこの無限再生と銃撃。いや銃劇は終わらない。

サカサはもちろん終わらせるつもりはない。ミネルヴァというデバイスの活動限界が来るまでこうやって遊び通す。

「殺せ、殺してくれええええええええええ！」

「俺は言つたよな？お前は永遠に生きながら俺に殺される」

バジリスクがガトリングで吹き飛ばす。

ジュエルシードが再生を始める。

バジリスクは待つ。オノトが回復するまで。

回復したオノトを撃つ。回復。待つ。撃つ。回復。撃つ。回復。

撃つ。回復。撃つ。回復。撃つ。回復。撃つ。回復。撃つ。それが

延々と続いた。

それまでの時間。約五時間。ずっと笑顔だった。悪魔とも道化師とも取れる笑顔で。気が狂った人のように笑っていた。

それまでの行いを遠くから見ていたリニスは戦いた。そして、こ
う認識した。

「くはははははははははははは」

サカサを絶対に怒らせてはないと。

三日後。

サ力サ視点。

あれから俺はミネルヴァの活動限界ギリギリまで玩具オノトで遊び、戦艦の中に積んでいる物の中で一番頑丈であらゆる電波も通さない金庫を呼び出した。

これは日本にいる従兄弟にリオストーンを入れた箱と同じ性質で、これの中でならあの石の力も外には及ばないという実験成果出ているので大丈夫だろう。今でもあの金庫が保管されている格納庫では異常が確認されていない。

現にあの周りにある樹木はエルの食いちぎった石はシエルターの中に放りこんでからは普通の樹木として生えている。一応、サンプルに何本か切っていくか。

そんなことを考えていると足元から声をかけられた。

「サカサー、お腹すいたー」

「すいたー」

「へーいへい、少しまってる。すぐに美味すぎて心臓麻痺を起こすくらいの魚料理を食わしてやるから」

声をかけてきたのはこの国の住民。今では百人ちよつととなった彼らの島のほとりで俺は戦災復興としてリヴァイアサンに乗り込んでいた部下と一緒に炊き出しを行っていた。

ちなみにリヴァイアサンはあの浮沈艦大和の模したものだがその全長は本物の十倍以上で小さな島の面積を軽く超える。

海上を移動する鉄の島に近い空母である。

そこから重機や食料。緊急時用のテントやプレハブ小屋を持ち出して、この国の住民に有償で提供している。

「それは毒でしょう」

「失敬な、軽い中毒性を持っているだけだ」

「今、毒って、言わなかったか？」

「言ったよー」

「否定しろよ、この野郎！」

「まあ、それぐらい美味しいということだ。…と、できた。ほれ、ユト。テレ。他のちびども呼んで来い。」

「「はい！」」

ちび達が走ってプレハブ小屋に走って行った。島の奥にはいまだに俺が破壊しつくした爪痕が無残に広がっている。

とは言っても、作業を行っている人は俺の部下は30人。住民は20人と住民よりも外から来た援助の人たちの方が多い。そうなるまでこの人たちは追い詰められていた。

「サカサ。…いや、ボス。あんたは悪くないぜ。だからそんな顔するな」

「別に？ 気にはしていないぜ。ミネルヴァの黒船や青蛇。ピナカに新しい銃器やシエルターの機能実験が出来たんだ」

「…ならいいんだが」

「…サング。そこまでいうならお前にここの支部長を頼みたい」

「っ！ な、今なんて…」

30歳代。浅黒い肌に筋骨隆々の坊主頭の男。サンクはこちらの顔を見て、驚きの表情を作った。

俺が自分の組織を作り上げて六年。ずっと俺に付き合ってきた奴が初めて「頼む」という言葉を使ったかもしれないな。

「今は俺が裏で声をかけているからまだ知られていないが、近いうちに他の国々がこの島の所有権をめぐって総論になる。そうならないようにここにリヴァイアサンの補給基地兼隠れ蓑にしたい。こここの宰相を担ってくれ」

というよりも、この島でリヴァイアサンのメンテナンスを行わないといけないからな

リヴァイアサンも宇宙ステーションのようにその姿を航行しながら作り上げた合体母艦のようなものだ。様々な国や地域で作り上げ、また俺ではなく部下が組み立てたので不備が起きてもおかしくはない。それに最近手に入れた潤滑油の調子も見てみたい。

「あ、ああ、任せろ！またお前が来るまでこの国は守り通してやる！」

「んじゃ、任せたぜ。俺はあと一日滞在したらへりで日本に行く」

ここから日本に行くとなるとへりで一日ほどかかる。

ツルギに渡したりオーストーンの様子も見てみたい。と、今後の予定を組んでいたら子供たちに引きつられ歩いてきた20代、ショートカットの女性。

「サカサ。お待ちせしました。今、食卓の準備をしますね」

きれいというより可愛らしい雰囲気を持った女性。しかし、彼女はこの島の住民でなければサカサの部下でもない。彼女は…。

「ああ、任せたぜ、リニス」

彼女の名前はリニス。

三日前まではこの島の新女王となったエルの使い魔であつたが、今ではその契約を破棄、そして新たにサカサと契約を結んだ使い魔である。

「…サカサ。本当に行かれるんですね」

「おお、これは女王様まで御足労かけます」

「もう、その言い方は意地悪です。あなたはこの島救つてくれた英雄なんですよ」

背中の方から声がかけられ振り向いてみるとそこには迷彩の作業着をつけた新女王のエルがいた。

「英雄なんて大したもんじゃねえよ。ちゃんと見返りとしてリニスのマスターにさせてもらつたんだし。その上、俺の船。リヴァイアサンの停泊も認めてくれたんだ。これぐらいは当然だ」

「むう、確かにそうですね。リニスの為でもあるんですね」

「リニスの為というよりは俺の為だな」

俺は炊き出しの魚鍋を新品のたらいに移しながらエルと会話をする。

「そんなことはないですよ。王の石。…いえ、正式名称はジュエルシード。その不思議な石を使ってリニスの会いたがっているフェイトに合わせる。その為にもおに・・・サカサは日本に帰るのでし
よう?」

ぶっ。

今、お兄ちゃんと言葉が滑りかけたな。

どうやら催眠療法が効いたらしいな。あのオノト絡みのトラウマ（・・・）もちゃんと忘れていようだし。さて、食事にでもするか。

「エル、サカサ。皆さんが集まりましたよ」

設置されたテーブルの上に様々な料理が並ぶ。

船から持ち出した食器や食料を目の前にした子供たちや島の住民は目を見開いてその御馳走を凝視していた。

そこに俺が運んできた魚鍋を置き、俺も席に着く。

「この後もまだまだ瓦礫の撤去が続く。その為にも俺の飯を食って体力つける。皆、手は洗ったか。それじゃあ、いただきます」

「……………いただきます……………」

俺が手を合わせて日本独自の動作をするとみんなそれにならって手を合わせてお辞儀をした。

後にこの仕草がこの島の住民の作法となるのはこれから十年後になる。

そして、

「サカサ。本当にありがとう。私たちとこの島を助けてくれて」

翌朝。リヴァイアサンの上に設置されたヘリポートに俺とリニス。そして、この島の新しい女王。エルがいた。

エルは艦内にあった赤いドレスを購入し、瓦礫の中から王族のみがつけることを許された宝石で着飾るという豪華な格好で国の代表として俺の見送りをしていた。

その姿はまさに王族。いや、女王としての気品と優雅さ。そして可憐さを十二分に発揮していた。今なら世界中の大概の男は見とれるだろう。

リニスは気をきかせてヘリの中で待機してもらっていた。

「なに、この島の魚や果物は俺の舌も唸らせるほど美味いからな。助けるのは当然だ」

「ふふ、毎日食べてもいいですよ。ただし、私の側近になるのなら。ですけど」

「そいつはいいね。だが、誰かの下に降るのは断る！」

「…ならば、私の伴侶ならどうです？」

エルは俺の胸に飛びつきながら小さな声で。それでも俺には聞こえる声ではつきりと言う。

「前政体の状態ならだれもが反対なさったと思います。だけどサカサ。今のこの国でならあなたを拒否する人間はいません。私はあなたが欲しい。あなたにそばにいて欲しいのです。私を支えてほしい」

エルは俺がオノトを無残に痛ぶる光景を見ていないからそんな事を言えるのだろう。破壊衝動に駆られた俺を見ていながら。それでもいいと思う人間はごく僅か。この船にいる部下たちだって俺のあの状態を知って入るものの畏怖してきている。それでもついてきているのは俺に期待。もしくは何らかの目的があるから。

その目的はサングラスを取って、この眼で見れば一発で分かるのだが見はしない。なぜならその方が面白いから。

「…サカサ」

とと、脱線が過ぎたな。さて、エルの気持ちにこたえてやるか。

「すまん、エル。お前の気持ちには答えられない」

「…理由を聞かせてもらってもいいですか」

エルはその紅い瞳に涙を浮かべながら訪ねる。

「それは俺がバジリスクだからだ」

裏でも表の世界でも俺は暴れまわっているからな。

この巨大戦艦リヴァイアサンや極太レーザーを照射する人工衛星ピナカ。様々な重火器を開発し、扱っている。やりはしないが、ハッキングすれば世界中の核ミサイルをぶっ放すこともできる。

それらの全てをとある組織。国が手に入れたとしたら世界のパワーバランスが崩れる。いまでも大国を相手に喧嘩しても勝てる自信がある。

そんな奴がこんな小さな島にいと知れたらどうなるだろうか。

答えは簡単。

暗殺。もしかしたら核ミサイルを何十発も撃ちこんで島ごと俺を

消し飛ばしかなない。

リヴァイアサンは潜水艦の機能もついているから海底に逃げ込めるが地上となるとそうはいかない。

この国の住民。しかも列島となるとその島ごとに打ち込んでいく。その島々の住民を避難させこの戦艦に逃げ込ませられるか？

答えはノーだ。

小さい島と島の間が広すぎて、ミサイルなどの対応に間に合わないから。

「それにお前は王女。いや、女王だから」

この国の象徴。心の支えである彼女の伴侶となれば世界中からこの島は狙われ、後は先程説明した通りになる。かといって、エルがこの島を離れば完全にこの国は瓦解する。

自分の民を見捨てられるほど彼女は身勝手ではない。

「安心しろ。エル。ここにはサンクを初めに俺の部下を数人おいていく。あいつはムキムキだけど頭がいい奴だ。この戦艦も一年間はここに置いていく。必要な物があつたら武器とか兵器以外は好きに使ってもいい。サンクにもそう言っている。だから俺のことは忘れて」

「…ない」

「どうしたエル？」

「絶対に忘れたりなんかしない！周りの脅威がどうしたというのですか！」

いきなりの大声に俺はもちろん。ヘリの中にいたりニスも顔をの

ぞかせて目を丸くした。

「世界が、そんなに甘くないことは知っています。だけど！その先は分からないじゃないですか！」

あれ？これってあの剣バカと同じ台詞じゃ…。

「例え、この先、十年そんなことが無くても十一年後。二十年後には傍にいられるような世界があるかもしれないじゃないですか！」

百回で駄目なら百一発。千回殴っても駄目なら一万発殴る。そうすれば碎ける壁もあるかもしれない。

…そうだったな。ツルギ。

「そんな未来を、世界を作るために私は頑張ります。だから決して私は忘れません！」

涙をボロボロとこぼしながらエルは俺の顔を見続けた。

容姿どころか性別すら違うのに、ツルギに似ている。そう思った。

「そうなるころには俺はもうおっさんかもしれないぞ」

「それがどうしました。私はそれでもサカサのことを想っていますよ」

参ったな。これは正攻法で落とすのは無理だな。だけど、なかなか面白い。だから…。

俺は俺のことを見上げているエルの唇を奪った。

「ん」

触れるだけの軽い口づけ。それでもエルは幸せそうな顔をしていた。

「なら作ってみな！そんな世界を！」

「…作って見せます！絶対に！」

俺は意地悪な笑顔をエルに見せるとエルも似たような笑顔をみせる。

それは意地悪というよりもかかってこいと言わんばかりの笑顔だった。

キュンキュンキュンキュン。

そして、俺はへりに乗り込み自分で操縦する。

俺の部下はこの国の復旧の為に皆尽力を尽くしているのだから仕方ない。

戦艦の甲板からへりが浮かび上がる。プロペラの風を一切気にせず、エルは俺とリニスに手を振って見送る。

「エルー。今度来るときはフェイトも連れてきますからねー」

「うん。リニスもー。でもサカサに手を出したら怒るからねー」

「出しませんよ。失礼な！」

それは俺に失礼じゃないか？

「サカサー！私は作ってみせるからねー！」

エルはどんどん離れていくへり向かって大きく叫びながら手を振り続けた。

そんなエルの行動に俺は意地悪な笑顔で答える。

「そんな世界が出来たら、俺はお前の物になってやるよー！」

「っ絶対。絶対ですからねー、約束ですよー！」

戦艦が遠ざかりエルの姿が見えなくなる。

俺の言葉を聞き取ったエルが最後に見せた表情はとても魅力的な笑顔だった。

「…サカサ。私はあの子は本当に成し遂げると思いますよ」

「それはそれで面白いじゃないカリニス。それに無茶で無謀なのは俺たちも同じだろう。何せ、ジュエルシードというファンタジーな物を使って別世界に行くなんて考えている学者とそのお供だぞ」

それにそのジュエルシードを集めて叶えたいリニスの願い。

それは、フェイトに逢うという願いを持っているリニスはエルと一緒にいると行動の範囲が狭まる。

対して、俺はジュエルシード自体に興味があって世界中を飛び回っている上にそのような情報が集まりやすいという点でリニスのマスターとしてエルより優れている。

それらを総合してリニスはエルとの契約を破棄して、俺と契約を結んだ。

「マア、ソノ、ベッセカイノ、ゲンブツガ、ココニイルンデスケ

ドネ」

「そういうな、ミネルヴァ。お前もリニスに改良してもらったんだからよ」

助手席に座っている人型になったリニスの膝上には琥珀色の手袋が置かれていた。

リニスと契約を結んだ後、デバイスに詳しいリニスにミネルヴァの改良依頼。二日でその改良が済んだミネルヴァはその形を水晶玉から手袋へと変えた。この改良により俺からの魔力供給がある限り喋り続けることが出来るようになった。

「サカサ。ジュエルシールドは前にいた世界で前の主人が調べていた物で願いを曲げて叶える魔法の石。それを本当に浄化できるデバイス。剣があるんですか？」

「シンジロ。オレノ、オトウトダゾ」

「避来矢って、男だったのか。というかお前らに性別あるのか？」

まあ、行って確かめればいいか。

「さて、目指すは日本。海鳴市！」

エルと同じように願っても叶うことがないことを理解した愛すべき馬鹿。それを理解した上で行動する馬鹿がいる日本へ針路をとった。

十年後。

女王エル・クシャトリアは一人の子供をもつける。

その子供は父親譲りの黄金の瞳をしていた。世界的には未婚で貫き通していたが、十年前からこの国にいた民は誰もがその存在を知っていた。だけど、それは自分たちの家族関係の人間にしか知られていない。

バジリスク。

それは子供の親の名前ではなく名称だった。

そのの意味を知った人間は恐れ慄くが国の住民はそれを誇りに思っていた。

後に黄金の蛇を国旗として扱い、その国は黎明期を迎えることになることをサカサは未だに知る由はなかった。

黄金の瞳のバジリスク。

完。

第五話 黄金の瞳のバジリスク（後書き）

あとがき。

エル「いやったー！最後の最後に私はお兄ちゃんの子供を孕んだぞー！」

ミネルヴァ「ソレヲオオゴエデイウ！？」

サカサ「…それが若さだ」

リニス「…エル。よかったですね。幸せいっぱいの夢いっぱい。私は殆ど空気でしたよ」

ミネルヴァ「マア、ドンマイ」

リニス「うう、無を有する剣。では絶対に今よりたくさん活躍してこの扱いを脱します！」

サカサ「…（裸眼でリニスを見ている）…」

エル「お兄ちゃん。どうしてリニスを、サングラスを取って見て泣いてるの？」

サカサ「…いや、不憫に思えてな」

リニス「どういふことですかそれは！？」

ミネルヴァ「シリタイ？」

リニス「…やっぱりいいです（涙）。いいんですよ。どうせ原作では消えている存在なんですから。…生きているって素晴らしいことなんだあああああ！」

エル「だ、大丈夫だよリニス。そ、そうだ、お兄ちゃんを国王にして第二婦人にリニスを混ぜてあげるから…」

サカサ「その慰め方はアウトだろ。それに生きていることが辛い奴だっているんだぞ。主に俺の手によってだけど」

エル「え？それって…」

サカサ「とりあえず、このお話はこれで完結」

リニス「ここまで読んでくれた人に感謝をこめて」

エル「ありがとうございます！」

たかB「…あれ？もう一話あるじゃん。と思った人。これはとあるクズの末路を書いたIF。もう一つの結末です。すっきりした状態でこの小説を読み切りたい人は読まない方がいいですよ」

。。が忘れた現実（ゆめ）。（前書き）

まえがき

読むんですね。
ではどうぞ。

。。が忘れた現実（ゆめ）。

。。が忘れた現実^{ゆめ}。

ガコンッ。

「~~~~~！！」

巨大な歯車の歯が動くと同時に空気を震わせる、声にならない声が響いた。

とある小さな部屋に備え付けられた巨大な二つの歯車。その歯車は部屋の外に繋がっている。

オノトを金庫の中に閉じ込めて一日が経過した。

あの悪夢のようなことから一日が経過して私は目が覚めた。

私はお兄ちゃんにオノトを引き渡すように頼んだ。もちろん奴を殺すためだ。が、それを断られた。その理由として。

―あいつには利用価値がある―

私はその言葉に一瞬で怒り狂いかけたがそれをリニスに止められた。

リニスは彼がただで生かすはずがないと。そのあまりの説得力に私はどのような価値があるのかと聞いた。だが、私はそれを後に後悔した。

…聞くんじゃない。

その質問にお兄ちゃんは口元を三日月状にして笑っていた。

知りたいのなら教えてやる。ただし、条件がある
その猫を俺に寄こしてほしい。そしたらお兄ちゃんは答えてやる、と。

知るんじゃなかった。

私は怒りまかせに頷いた。

そして、お兄ちゃんは戦艦リヴァイアサンの立ち入り禁止ブロックに招待された。

そして、油室。と書かれた部屋の前によばれた。

見るんじゃなかった。

壁の一部が強化ガラスに阻まれてはいたがその部屋の中にあつた。そこから中の様子が見えたそこにはゆつくりと五分ごとに一つずつ歯車がかみ合う仕掛けの部屋。

部屋の中は赤と白が飛び散っていた。

ガコン。

「~~~~~!!!!」

歯車がまたかみ合う。しかし、かみ合うその歯車の真ん中にあつた白い柔らかいモノ（・・・）が歯車に巻き込まれていくと、それはビクンビクンと蠢き、苦悶の表情になった。

ぐちゅぐちゅ。

しかし、歯車に巻き込まれた部分は腐った肉にまわりつく蛆のように動くと千切れた部分を残したまま潰される前の状態にもどっ

た。

「体脂肪率80%越えの奴の油はこの戦艦の潤滑油にできる。しかもこいつは一定時間過ぎればまたかけた一部を何の代償もなしに復活させるからいくらでも搾り取れる」

赤は血や筋肉。白はその周りについていた脂肪。

それを理解した時、私は自分は夢を見たんじゃないかという現実逃避に走る。が、それを理解した時にその白いモノ（・・・）と目があつた。

「っ！っ、っ、つつっ！」

それは、身動きが取れないように拘束されており、その口には悲鳴を上げられないように猿轡さるめくわ噛くわまされていた。

「最初はざまあ。と、思っていたんだがな、聞き飽きるとウザくなつたから噛ませた」

私に助けを求める目。ここから出して！という目に私は体を震わせていた。

そして、私の隣に立つお兄ちゃんはその顔を見て悪魔のような微笑みを浮かべていた。

「あいつは俺が永遠に殺す」

その顔を見て私は目を合わせないように再び齒車の方に目を向けた。お兄ちゃんを見れば私もこうなるんじゃないかと思うぐらいにその笑顔は凄惨な物だった。

「つつつつっ！」

「…はー…はー」

「…エル。もう忘れる」

私は過呼吸状態に陥っていた。

その状態を見てお兄ちゃんは私の首筋に手刀を打ち込み意識を刈り取った。

だけど、その動作は遅かった。意識を失う直前で私は聞いてしまった。巨大な歯車が何かを潰す音を…。

ガコン。

。。。が忘れた現実^{ゆめ}。

完。

。。が忘れた現実（ゆめ）。（後書き）

あとがき。

はい。これはIFです。この小説のエルは本来、リヴァイアサンの油室にはいつてはいませんがオノトは今、この状態です。少なくともリリカルなのか？無を有する剣 無印編 が終了するまではこのままです。

外道の末路は死刑ではなくこのように生かさず殺さずこのようにいたぶり続ける主人公サカサ。彼は裏社会ではこっちの方面でも有名なので彼と敵対する人間はかなりの決死の覚悟。負けたら死のう。という覚悟の元で争いあいます。

あと、この小説で出てきたジュエルシードは曲がった願いを叶える物。ではあるが扱う人間がそれ相応に曲がった奴だからその人間の願いをそのままかなえたという設定です。

まあ、そのせいでこんな結末なんですけど・・・（黒笑）。

さて、この後のサカサはリリカルなのか？無を有する剣。の主人公ツルギと合流を果たします。それからどうなるかは読んでからのお楽しみということ。

それではまた。機会があつたらお会いしましょう。ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9422v/>

リリカルなのか？黄金の瞳のバジリスク

2011年11月17日01時04分発行